

年六十八百八千一主吾  
著非格君楊清大

宣教士美國エ、デ、グリング君閱  
木曾五郎釋

# 眞理ハ篇

東京

鈴木清左衛門刊

真理八篇序

夫造宇宙及其中之萬物者神也。乃天地之主，不居手造之殿，不爲人手所事。猶之若有所需者，彼以生命與呼吸與萬物予衆，彼且造萬國之民，本於一脈，使之居於地之全面，預定時期及其所居之界，欲其尋主，庶揣摩得之。然主離我，各人不遠，蓋我儕賴彼而生而動而存也。苟盡心盡意盡性盡力愛之，又愛人如己，則愈諸蕪穢祭祀多矣。而世人忘厥大本神之聖諭，亦與之淪沒也。真實无妄，天地一主，遂易爲無。

數之假偶、天下同道、漸變爲雜出之異端也、悲夫、且以堂々  
吾大日本國、亦無論貴賤賢不肖、有識與無識、俗則倣唐人  
心、則化佛法、浸灌滋潤、漸漬浹洽、一千六百有餘年、干茲矣、  
頃者、義日東昇、真光天照、斧置樹根、凡樹不結善菓者、則見  
斫而投於火也、吾同胞三千七百有餘萬、生靈誠可以惕然、  
警醒矣、北英聖書會社、長坂君、間嘗得本編、偶見寄示、書雖  
簡約、其所論且述、皆緊關未窺、吾基督教門牆者、切要事情、  
盡是福音真理也、吾因請而釋之、展翫無幾、宣教士大美國

啞呢呀玲先生、閱而善焉、愆恩鐫鏤、冀遠自邇、高自卑、道由  
此悟、以訓迪夫二三子者矣、往者冒昧、神不咎之、今乃命隨  
在之衆人、悔改、蓋彼已定一日、欲以所立之人、由義而審判、  
世乃自死中復生之、俾衆徵信焉、即凡看此書者、勿之謂不  
有啓我者、何能識之耳矣、刊告竣爲之序、

吾主一千八百八十六年六月二十五日木曾五郎識

真理八篇序

此編の牧師楊君格非の所著の徳慧入門及び天路指明等書の後、成れり編帙の甚だ多きを見て、全覽の易らざるを恐れ、因て今各巻中の其尤も人よ關せる者、八編を摘で、訂して一本となし、顔して真理八編と名く、一の眞神の真理、二の萬有の本原、三の天地の大局、四の化學の記畧、五の救世の眞主、六の重生の道、七の復生の道、八の悔改を爲要なり、小許と雖ども、多許に異らば、小成より以て大成に至らん、此より、驪珠握りあり、何ぞ豹管略窺を嫌ん、世の此書を開き見る者、眞神の感化を得て、鄭重に是を視ば、玩索して可得あらん、寶子子の厚望する所あり、沈子星敬序

真理八編

真神の真理

異なる哉、天下の事、人皆眞實を求めて神を敬するハ、虚偽を同尙  
 ひ大概、所不識者を崇拜して神となし、又古人を神となし、眞  
 神と号する者あり、吁、假神の道、以て教を設れバ、其害を流せる、  
 此種に至るなり、今特ニ、其實を掲て、其偽を去り、眞神の眞理  
 を考れば、眞神ハ、天地人物を創造たる、大主宰よして、知ざる  
 所なく、能ざる所なく、在ざる所なく、始終なく、變易なきの神  
 なり、彼も根なくして出て、而して萬物の源なり、或問ハ、萬物  
 ぞ、眞神に頼て、而して有らば、眞神も、何の所頼ありて、而して  
 有やと、曰く、眞神は、既ニ萬物の根、萬物の本、萬物の源なれば、

必かなら所よる頼たうなくして、自みづか有らて永なが有くとを、所よる頼たうある如ごときと、萬ばん物ぶつと  
 同おなくして、真まこと神しんは非あつるなり、又また問とひ、何なにを以もつて、真まこと神しんあるを、知しるや  
 と、曰いはく、萬ばん物ぶつを觀みれば、便やすち知しるべし、世よは、些せ少せうの巧かう物ぶつあれば、  
 巧かう手てありて、做つく成りたるを、知しる、古こ今こんは、妙まう文ぶんを讀よみ、文ぶん章しやうの士しよ  
 り、出いたるを、知しる、屋いへを觀みれば、匠しやうの造つくたるを、知しる、鐘かね表ひやうを觀みれ  
 ば、鐘かね表ひやうの工こう人にんあるを、知しる、今いま仰あやて、日にっ月げつ星せい辰てんの、天てんに麗らるを、觀み  
 れば、措さ置ち恰ちやう當たうありて、運えん行こう常じやうあり、美み大たいなる、觀みるべし、備びへて  
 山さん川せん草そう木もくを、察さつすれば、秀しやう色しき人にんは、宜よろく、藥やく蔬そ穀こく果くわは、食くわて餘あまり  
 鳥ちゆう獸じゆう蟲ちゆう魚ぎゆうを、用もちて盡つぎるか、此こ外ほかは、人にんあり、一いち人にんの身みに、て、官くわん  
 骸がい備びは、具ぐり、各おの其の巧かうを、極きめ、各おの其の用ように、適てきし、更さらは、靈れい魂こんありて、一いち  
 身みの主しゆとあり、衆しゆう理りを、具ぐて、萬ばん事じは、應おへ、此この如ごとき、天てん地ち人にん物ぶつあ

る、豈あ偶ぐ然ぜんならんや、豈あ全ぜん知ち、全ぜん能のう、全ぜん仁にん、全ぜん善ぜん、大たい造ぞうの主しゆ宰さい、是これを、經けい  
 營えいし、是これを、建けん立りつし、是これに、賦か卑ひとる、なうらんや、儒じゆ書しよの、所ところ載ざいを、按あん  
 ぜるよ、中ちゆう土との古こ人にんも、真まこと神しんあるを、知して、尊たつて、大たい主しゆ宰さいとあり、是これ  
 を、敬けい拜はいせしを、証しやうせば、虞よ舜しんの、類るいを、上じやう帝ていは、肆しる、夏か禹うの、昭あきし  
 上じやう帝ていは、受うたると、言いへる、成せい湯たうの、惟これ皇かうなる、上じやう帝てい、東あづを、下か民みんは、降くだ  
 ば、と、言いへる、又また子れを、上じやう帝ていを、畏おそる、敢あて、不たふ正しやうバ、あらざ、文ぶん王わう、陟しやく降かう  
 して、帝ていの、左さ右うは、在あり、と、曰いふ、武ぶ王わうの、天てんを、下か民みんを、佑たすて、是これが、君きみ  
 とあり、是これが、師しとあり、惟たゞ其の克よくく、上じやう帝ていを、相あく、と、曰いふ、孔こう子しの  
 郊かう社しゃの、禮らいは、上じやう帝ていは、事ことる所ところなり、と、曰いへる、孟もう子しの、惡あく人にんあり、と  
 雖いとも、齊さい戒かい木もく浴よくれば、上じやう帝ていを、祀まつるべし、と、曰いふ、如かく此のの、語ごは、  
 指さも、屈くつするに、勝たざるなり、惜おんは、後こう人にん、此この、真まことの、真まこと神しんを、離ひれ、愈よく

離て愈遠く、今に至て、幾ど眞神あるを、知ざるなり、妄に佛及び菩薩及び玉皇等を認て、眞神とあり、或の天地を認て、眞神となし、或と眞神と、一の條理と云ひ、因て妄に如此の多を認め、故に眞道を、宜傳をる者と必き一一其迷誤を、破るべきあり、○佛と上帝と非るなり、佛書は佛を言る、甚多く、釋迦牟尼、阿彌陀佛、及び彌勒、燃燈等の名あり、按るに天竺國の、即ち今の、大英の屬國あり、前代は釋迦牟尼あり、耶穌の前、約六百年よ、生れたり、其餘の諸佛と皆假捏の名號にして、絶て其人あかりじなり、佛の一字と眞神の稱は非也、佛書は云く、佛とも、覺るかり、明に覺るなり、迷と衆生にして、覺は是れ佛なり、と謂へり、在昔釋迦牟尼と人ありじなり、其人となり、天倫

乃樂を顧ぎ、出家して、師となれり、其師となれる意の、世界を救んと欲せしなり、然とも、其所言の道は大に錯れり、是は由て、觀れば、何ぞ能く、佛を認て、眞神とせるを得んや、○菩薩も印度の語なり、佛書に曰く、菩薩と、學道者の通稱なり、菩薩の天上に權を操れる神は非也、本と只是人なり、或曰く、佛の一字は、明に教ふるあり、菩薩の二字と、問て學ぶあり、乃ち菩薩と稱せるを、猶學生と稱ゆる如し、孔門の顔曾、閔再を、何人も認て、眞神となさき、神とせざるなり、釋迦の學生を認て、眞神とあり、神となさば、悖れるの、甚たしきなり、○世俗の最重なる者を、玉皇と稱し、即ち天上至尊の眞神となせり、是を究るは、玉皇の、人なり、乃ち古の張姓なる、一羽主なり、宗の徽宗よ

蓋て法士林靈素の説は因て始て封して玉皇上帝となむた  
の其所封は實は方士の靈惑ま由れりなり漢魏以前は玉  
皇の立字なく孔孟の書に皆載たるなかりし然れども徽宗の時  
始て册封を行ひたり然るが玉皇を封せざる先はもと三才は其  
れ誰が主宰せんや國尚一日も君なかるべからず若し三才  
主なればれは早く乾坤の顛倒し寒暑の紊亂なるを見ざらん  
や且萬物は必ず是を造たる者あり是を造れば即ち是を主  
宰し若し過して一羽子を認て眞神となす妄に塑て是を奉  
ずは何ぞ途人を指して以て君父とするは異らんや若し  
途人を載て君父とせば叛逆にむて本を志れるなり罪逃る  
可はず況や妄に一古人を認て眞神とをせや中國にて所

敬の上帝ハ一ならん玉帝協天元天等あり然ども是等眞  
神は非き自有永有の主は非き乃ち人の封號を受て而して  
成れる者なり張儀の玉帝たる劉長生の眞武たる關太師の  
雷祖たる黃飛虎の東嶽大帝たる關公の協天大帝たる此等  
の事往々有之とを若し其人よむて非常の人たれば必だ群  
起ひて是を崇敬するなり華陀の醫關公の忠玉帝の慧の時  
の推重する所なり是を祀て神となし人君も亦從て是を封  
じ人民も敬拜して是は媚るなり然ども此人を封じて神と  
かむ眞神とせれば其名ありて其實おく至愚至惡の俗俗り  
人の至て卑し人を封じて至尊の眞神となす變亂せる何を  
以て此に至れるや五帝玉帝元天協天紫微雷祖及び人の敬



拜せし一切の神明神道本論なる既死せるの吾人非の  
乃ち天の臆造せる所なり或は君臣の所封なり或は佛道二  
教の所封なり是を真神と稱して是を敬拜するは是れ實を  
自欺の甚きなり而して眞神の二字の尊榮匹せしむ如  
何を妄ま是を人よ加え如是の高天の眞主を侮慢し其者  
を竊て其識を犯すあり罪焉を道るべけんを三國の只一主  
あり設六國に兩主あらば人必を寧めず況や兩眞神ある  
を或は或曰く眞神は惟一なるを天地人物を管理するは必  
百神に頼て是を佐え國君の諸臣輔翼をけられ國治ら  
ざる如きと曰く此の道は明ならざる者言はて眞神と太  
皇地を在は始て此妄論あり國君を三國の尊たりと雖ども

是を究るは人なり才識限あり故も必百官の匡輔あるを  
若國君も亦知ざる所なく能ざる所なく在らざる所か  
何ぞ群臣を用て相助て理めんや眞神も然らば全知  
全能は下で隨處に皆在り天上にある所の天使も世上にあ  
る所の人も同く眞神の造なれば才徳も同く眞神の賦たり  
實に皆眞神の僕なり然とも眞神の不可少とせる所の者は  
非ぞ帝恩を蒙り帝役を服するの故か人よ三眞神を認  
て主宰はなすべきなり求あらば一眞神は求め得らあらば  
一眞神に謝し萬有の榮光を見れば必此の一眞神を恭敬  
頌美をなさなり中國は久く眞神を忘れて是事へも萬物も  
眞神に由て有り眞神に頼て在るを知るも因て妄く天地を

神由なひ並み天地の所有の物を神とあせる火神水神  
風神雨神電神等是なり又古人を拜して福を求め福を免ん  
と信て是を信じて疑もざる者あり然し禍福ハ皆真神の是  
を主で彼の何與おきを知らざるなり宜く盡べき所の木石  
金土彫刻鑄塑及び紙繪の偽像を棄て而して恒に一真神を  
敬すべきあり昔真神誠を垂て曰く余れ外に別な真神ある  
可らずと獨一なるを謂へるあり  
萬有の本原  
混沌は陰陽の分れざるの象ありと云と雖も却て混沌は  
何よりして有之を知らずと並み混沌を開者誰あるや乾坤  
を定たる者久又誰ありしを知らず明も其承有る者も非ず

を知らずも究るま肇造せる者必も三才の上は超出して  
三才の中より圍せらるるも亦必も大智慧大能力を具て以  
て此の三才を造れりなり肇造せる者が既に三才の始たる  
に自ら必を始おきを知るべきあり若し始おらば三才と同  
く受造の物たり問ふ何を以て三才の外に造物主あるを知  
るや曰く此理の必然なる前編に云る如く世に些少の巧物  
あれば巧手ありて做成を知り古今の妙文を讀む文章の主  
よりして出るを知り屋を見れば匠の造たるを知り鐘表を  
見れば鐘表の工人あるを知り今仰て日月星辰の天に麗  
るを見れば排列の得所たる位置の穩固を其四季の均平を  
る晦明寒暑の互更るるを其俯仰して地面の山川草木を察し

此の美入は宜く五穀百果各其口は適ひ鳥獸蟲魚各其用  
 あり此外の人あり一人の身官骸備具り各其巧を極め各其  
 宜に適ひ更に至寶の靈魂ありて衆理を具て萬事に應ずと  
 此數端を擧て言へ必ず是を肇造する者あるを知るなり否  
 天地人物何より出るや或曰く天地人物の造は關るに非  
 ざるなり天象も布置均なりと雖も四時其序ありと  
 雖も人の百体の妙なりと雖も悉く自然は本ける者に  
 して何を經營の力を須んやと曰く一の王巧なる物に遇は  
 吾固り自然は出るに非ず必ず作者あるを知らず千萬人自  
 然より出ると言と雖も吾決して信する能はず何を況や  
 天地人物其造化主なむと謂を得んや或曰く人は明かして造

ま關る非ざるなり父母の生めたる所は自然より出  
 ま非ずやと曰く人の人たる故に二あり一を造り一を生る  
 を男男女女交合し精血凝聚して胎を成すと一毫の心思を費  
 ざるなり胎中にあるに父母其男女たるを知らず亦其官  
 骸の全否を知らざるなり其生るあ及で百體各妙用あり意  
 匠をもて經營せる實は平常の比すべきは非ず造化主の神  
 巧を默運はるは非ずと謂んや生たるは父母として造れる  
 は父母は非ざるなり是を物々は推して皆然らざるなり且  
 今の人物は各父母ありて相生じて息まざるなり首出の人  
 物は然るは非ず必ず是を造て始有る由てなり此は由て觀  
 れば大造せるは誰たりとや曰く眞神なり人類は同かばず

死生より外として天地は先ち宇宙の其匠心より出て萬物  
 の其主宰をるは憑れり要するは眞神の萬有を肇造せるの  
 眞源あり其本體の至神にして形なく自有て有り始なく終  
 なく其智慧權能聖徳公義仁慈誠實の皆限量なしと云○世  
 は萬物の本源は曉然たらざる者多し周易は曰く大なる哉  
 乾元萬物資て始り乃ち天を承くと此れ乾坤を以て萬物の  
 本源とあせるなり故に張子曰く乾との父を稱し坤との母  
 を稱す而して其中は生れ凡そ天下の人皆天地の子なり  
 と類ね此の如き説の皆人の性體の何者にて成れるを知ら  
 ず亦人の本源の何たるを知らずして此の太謬あるを致せ  
 ばなり天地の受造の物も亦て其徳其性の眞神の是れ賦せ

るは非るをさき思ふべし宇宙の間は凡そ所有の者の惟二  
 と道一の氣と曰ひ一は神と曰ふ氣は智慧なく靈覺なく自  
 主た善能はず亦自動く能はず神と然ざるなり天地も氣な  
 り眞神は神あり夫れ天地日月星辰等の既に皆氣に屬し自  
 主する能はず自動く能はず一神のありて是を主宰し是  
 を運動けるなり譬は天地は屋宇として眞神の工師なり若  
 し天地を以て眞神とあさば猶ほ屋宇を以て工師となす如  
 し又眞神の父母の如く天地は庭幃の如きあり父母は庭幃  
 の中より居て家事を主理れれば庭幃は父母なるは非るなり  
 此は由を觀れば人の天地の子に非ずして眞神の子なるこ  
 と明なり人は本二者を合て成れり一は肉身にして一は靈

魂なり、人身は氣物なり、形象あり、土の化成する所たり、以て  
 天地由混然として、一體なりと云べし、其同じく氣物たるに由  
 てあり、靈魂に至ては、大に然らず、神なり、故に聖經に云く、真  
 神人を造て已に有り、以て地及び地の所有を治めむと、五  
 官四體を皆靈魂の器用なり、目の能く見る、耳の能く聽き、鼻  
 の能く五氣を別ち、舌の能く五味を辨じ、手足の能く運動を  
 するは、皆靈魂是を爲さむるなり、心思の妙能は、宇宙の秘を  
 發し、萬物の理を格し、造化の奇を探る、尤も靈魂の大用たり、  
 鳥獸等の物は、只覺魂ありて、並に靈魂なし、故に人と同きこ  
 と、能はざるなり、人身は死はると雖も、魂は死せず、身は魂  
 官なき、官毀さるも、主人は在り、身亡ぶるも、靈は存し、人は死

死に、身は土に歸し、魂は眞神の臺前に至り、其行を視て、是に  
 報せらるるなり、儒書の言を察するに、天地と人を以て、混然  
 たる、一体とすれども、動植諸物を合て、嘗て同とせざるは、な  
 らざるも、其大なる錯を、是錯れり、天地萬物は、人の爲にむ  
 所造れば、人は、天地より、貴きかり、何ぞ能く、天地を稱えて、  
 父母とせんや、聖經に曰く、眞神を、吾主に立て、天に赫々たり、  
 地に巍々たり、主は、人子をして、少く天使より、遜せむ、後加  
 るを、尊榮を以て、任せて、所造の物を、賢く、萬物をむて、其下  
 へ、降せしむ、六畜、百獸、飛鳥、潜鱗、海中の百物、其統轄に、歸せざ  
 るを、も、魏々たる哉、我主眞神の、寰宇に在るを、と、宋儒は、多  
 くの、無極は大極と曰て、以て、造化の、樞紐、品彙の、根柢となせり、

然とも彼の無極大極は、方所なく、形状なく、萬物の根抵あり  
 を言と雖ども、究るよ、其知覺靈慧あるを言さるなり、若し知  
 覺靈慧なければ、塊然たる、一の呆物なるの、何ぞ能く天を  
 生じ、地を生じ、人を生じ、物を生せんや、人と皆知覺靈慧あれ  
 ば、是を生せし者と、必し知覺靈慧ありとを、此理明よし易し、  
 故は無極大極を、本原とあて可らざるなり、○朱子曰く、大極  
 只是一個の實理なりと、又云く、此理を、闢闢の主戸の枢  
 紐、ある如しと、男女萬物は、生々として、息まされば、此理は生々  
 の本たりと、而して又曰く、理を、情意なく、計度なく、造作なし  
 運、如此なれば、夫理を、何ぞ能く、生々の本生との主たらんや、  
 靈巧の物を造るは、必ず匠心を具ふる者なり、靈明知覺の人

を造れるも、亦必ず靈覺を具する者なり、理に至ては、天の  
 字と做して、解を可らず、更に真神と做して、解を可らざるな  
 り、理は本虚よして、天と即ち實なり、真神は神の實なり、天理  
 地理、人理、物理の分ありて、理は事々物々の、各其則ある者よ  
 就て、是を言へるなり、夫の則は、何よ自であるや、曰く、真神の  
 命は、従てあるあり、命ある者と、真神の人物に、賦をる所なり、  
 理なる者は、人物の真神より、稟受する所なり、真神有て、始て  
 理あり、真神なければ、理をささるり、若し真神萬物を、造化せる  
 氣を以て、形を成せり、理も亦是れ賦せるを、猶ほ命令の如  
 し、天地、人物、各其所賦の理を得て、稟受するよ、定體あり、運動  
 するよ、常度あるなり、日月、星辰、雨露、霜雪、雲雷、電、山、海、川、陸

飛、濟、動、植、各、其、性、を、具、て、各、亦、其、用、を、成、せ、り、各、有、る、べ、き、理、を、  
 真、神、に、受、に、因、て、有、り、理、を、卻、て、情、意、な、く、計、度、な、く、造、作、は、  
 な、き、有、り、此、を、觀、れ、ば、理、は、真、神、に、非、る、を、明、な、り、造、鐘、表、者、の、  
 喻、を、以、て、せ、ば、其、始、は、必、し、念、を、一、心、に、潛、め、又、金、銀、等、料、を、體、  
 也、と、も、運、轉、し、て、時、を、報、も、る、を、以、て、用、を、な、ら、な、り、先、づ、一、の、  
 無、形、の、鐘、表、を、懷、し、擬、め、て、而、し、て、後、に、有、形、の、鐘、表、始、で、出、る、  
 有、り、真、神、の、天、地、人、物、を、造、化、せ、る、も、亦、是、の、若、き、有、り、鐘、表、は、  
 一、の、微、物、な、る、も、匠、心、な、け、れ、ば、造、作、の、有、成、と、能、ま、さ、ず、況、や、  
 宇、宙、の、大、よ、し、て、且、つ、巧、な、れ、ば、意、匠、の、經、營、す、る、な、く、は、何、ぞ、  
 有、之、ん、や、特、し、真、神、の、萬、物、を、造、れ、る、一、ひ、念、を、注、て、即、ち、成、り、  
 鐘、表、を、造、れ、る、者、の、多、く、心、思、を、費、す、が、若、く、あ、ら、さ、る、さ、り、真、

神、は、全、知、全、能、よ、し、て、萬、物、を、造、て、其、力、を、傾、さ、せ、其、勞、を、見、さ、  
 る、有、り、○、道、教、は、道、を、以、て、萬、物、の、根、原、と、な、せ、り、老、子、曰、く、道、  
 は、一、を、生、じ、一、と、二、を、生、じ、二、と、三、を、生、じ、三、と、萬、物、を、生、じ、と、  
 然、れ、ど、も、道、家、の、道、と、所、謂、一、に、し、て、宗、儒、所、言、の、無、極、は、大、極、な、  
 る、有、り、實、は、萬、物、と、同、く、し、て、萬、物、の、上、に、超、出、せ、る、者、は、非、る、  
 有、り、本、知、覺、な、く、靈、慧、な、く、虛、無、寂、然、よ、し、て、不、動、の、物、有、り、試、  
 し、思、へ、萬、物、の、體、は、皆、實、有、り、彼、虛、無、の、道、何、ぞ、能、く、是、を、生、じ、  
 ん、や、地、球、ハ、日、を、繞、り、日、と、諸、行、星、及、び、慧、星、と、は、亦、天、空、の、中、  
 樞、を、繞、り、運、轉、し、て、息、ま、さ、る、な、り、彼、の、寂、然、不、動、の、道、何、ぞ、能、  
 く、是、を、激、し、て、行、か、し、め、む、や、吁、天、地、萬、物、ハ、必、し、全、知、全、能、永、  
 生、の、神、有、り、真、神、是、を、肇、造、し、是、を、扶、持、し、是、を、主、宰、す、る、有、り、

かり彼の所謂道の無極は、大極と何ぞ以て是に當るに足ん  
 や、是を要するに無極、太極の氣なるの、理あるのみ、渾然た  
 る、一物あるの、無極の中、萬象森列を、故に是を、太極と謂  
 ふ、大朕極中、沖漠朕なし、故に是を無極と謂ふ、即ち天地分  
 れざるの、形象あり、混沌と何ぞ殊ならんや、亦真神の所造の、一  
 物なるの、聖經に云く、太初の時、真神の、天地人物を、創造せ  
 りと、又云く、真神の所造の者を、視て、盡く善とせ、又詩篇に云  
 く、主、我を造り、神妙なる、測れる莫と、經論せる、奇異ならざる  
 なし、是れ我の所知なり、是を頌美すべし、我の母胎に在て、造  
 を受たる、甚だ巧にして、骨體潜に長ず、皆主の所知なりと、富  
 なる哉、言や、此れ真神は、宇宙獨一の主宰、萬類の大本、萬民の

天父、人々の奉事すべき所の神なり、我は、衆人の邪を捨て、正  
 しく趨き、全く來て、此の真主を敬拜して、其愛子となり、永生を  
 同得んを願ふ、

天地比大局

古人云く、天の圓、地の方、大地は、中に在て、靜にして動かざり、日  
 月星辰は、其外を繞ると、然とも、古人管窺を以て、是、臆斷をな  
 して、能となせとも、實據あらざるあり、今、然らず、天文家、天  
 文を講じ、極精の千里鏡を用て、夜に觀て、日、算じ、更に各國  
 星士ありて、互に相考證、見る實に據べきあり、乃ち物に即て、  
 理を察せれば、違は、臆して、妄に談ずる、非ざるなり、天地の  
 大局の、人、都て、畧知べしと、以て、因て、要にして、淺近なる者を、擇



て、諸を梓<sup>し</sup>付<sup>ふ</sup>す、請<sup>こ</sup>ふ、是の編<sup>へん</sup>を、閱<sup>み</sup>せる者、細<sup>さい</sup>心<sup>しん</sup>に考究<sup>かうきう</sup>せば、自<sup>おの</sup>ら所<sup>しよ</sup>識<sup>しき</sup>あらん、並<sup>なら</sup>に談<sup>だん</sup>天<sup>てん</sup>、博<sup>はく</sup>物<sup>ぶつ</sup>新<sup>しん</sup>篇<sup>ぺん</sup>、格<sup>かく</sup>物<sup>ぶつ</sup>探<sup>たん</sup>原<sup>げん</sup>の諸<sup>しよ</sup>書<sup>しよ</sup>を、看<sup>み</sup>べし、天地<sup>てんち</sup>の大局<sup>たいきよく</sup>に於<sup>お</sup>て、更<sup>さら</sup>に詳<sup>しやう</sup>にして、且<sup>かつ</sup>つ悉<sup>しつ</sup>せり、地球<sup>ちきう</sup>ハ、行<sup>かう</sup>星<sup>せい</sup>の一<sup>いつ</sup>として、毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>自<sup>じ</sup>轉<sup>てん</sup>して、一<sup>いつ</sup>週<sup>しゅう</sup>と、毎<sup>まい</sup>年<sup>ねん</sup>日<sup>にち</sup>を繞<sup>めい</sup>て、一<sup>いつ</sup>週<sup>しゅう</sup>せるなり、其<sup>その</sup>毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>の旋<sup>せん</sup>轉<sup>てん</sup>は、西<sup>せい</sup>より東<sup>とう</sup>に至<sup>いた</sup>り、半<sup>はん</sup>面<sup>めん</sup>日<sup>にち</sup>に向<sup>むか</sup>ひて、光<sup>ひかり</sup>あるを、晝<sup>ひる</sup>となじ、半<sup>はん</sup>面<sup>めん</sup>日<sup>にち</sup>は、脊<sup>せき</sup>光<sup>ひかり</sup>を、夜<sup>よる</sup>となせ、其<sup>その</sup>毎<sup>まい</sup>年<sup>ねん</sup>日<sup>にち</sup>を繞<sup>めい</sup>て、一<sup>いつ</sup>週<sup>しゅう</sup>入<sup>いり</sup>行<sup>い</sup>て、日<sup>にち</sup>に正<sup>せい</sup>對<sup>たい</sup>する時<sup>とき</sup>を、暑<sup>しよ</sup>となじ、日<sup>にち</sup>に偏<sup>へん</sup>對<sup>たい</sup>するの時<sup>とき</sup>を、寒<sup>かん</sup>となせ、故<sup>ゆゑ</sup>に四<sup>し</sup>季<sup>き</sup>の別<sup>べつ</sup>あり、諸<sup>しよ</sup>の行<sup>かう</sup>星<sup>せい</sup>も亦<sup>また</sup>然<sup>しか</sup>り、皆<sup>みな</sup>日<sup>にち</sup>に倚<sup>よ</sup>て旋<sup>せん</sup>轉<sup>てん</sup>し、日<sup>にち</sup>に倚<sup>よ</sup>て光<sup>ひかり</sup>あり、日<sup>にち</sup>に倚<sup>よ</sup>て熱<sup>ねつ</sup>あり、其<sup>その</sup>四<sup>し</sup>季<sup>き</sup>寒<sup>かん</sup>暑<sup>しよ</sup>ハ、皆<sup>みな</sup>日<sup>にち</sup>に倚<sup>よ</sup>て成<sup>な</sup>るなり、地<sup>ち</sup>の形<sup>かたち</sup>ハ、渾<sup>こん</sup>圓<sup>えん</sup>にして、方<sup>かた</sup>隅<sup>ぐ</sup>あきと、球<sup>たま</sup>の如<sup>ごと</sup>し、然<sup>しか</sup>れども、細<sup>こま</sup>に是<sup>これ</sup>を考<sup>かん</sup>れハ、南<sup>なん</sup>北<sup>きた</sup>の二<sup>ふた</sup>極<sup>きよく</sup>ハ、稍<sup>せう</sup>平<sup>へい</sup>扁<sup>へん</sup>あるなり、故<sup>ゆゑ</sup>に

一<sup>いつ</sup>地<sup>ち</sup>形<sup>けい</sup>ハ、眞<sup>ま</sup>圓<sup>えん</sup>に非<sup>あら</sup>ず、扁<sup>へん</sup>圓<sup>えん</sup>あると、柑<sup>かん</sup>子<sup>し</sup>の如<sup>ごと</sup>きなり、地<sup>ち</sup>面<sup>めん</sup>ハ、陸<sup>りく</sup>地<sup>ち</sup>と水<sup>すい</sup>に分<sup>わか</sup>ち、陸<sup>りく</sup>地<sup>ち</sup>ハ、四<sup>し</sup>分<sup>ぶん</sup>の一<sup>いつ</sup>有<sup>あ</sup>零<sup>ぜい</sup>を得<sup>え</sup>て、水<sup>すい</sup>ハ、四<sup>し</sup>分<sup>ぶん</sup>の三<sup>さん</sup>ありて、畧<sup>りやく</sup>欠<sup>か</sup>たり、陸<sup>りく</sup>地<sup>ち</sup>ハ、分<sup>わか</sup>て五<sup>ご</sup>大<sup>たい</sup>洲<sup>しゅう</sup>とあせ、乃<sup>すなは</sup>ち、亞<sup>あ</sup>細<sup>じや</sup>亞<sup>あ</sup>、歐<sup>お</sup>羅<sup>ら</sup>巴<sup>ぱ</sup>、亞<sup>あ</sup>非<sup>あ</sup>利<sup>り</sup>加<sup>か</sup>、亞<sup>あ</sup>美<sup>め</sup>利<sup>り</sup>加<sup>か</sup>、澳<sup>あう</sup>太<sup>たい</sup>利<sup>り</sup>亞<sup>あ</sup>、是<sup>これ</sup>あり、地<sup>ち</sup>球<sup>きう</sup>の物<sup>もの</sup>たる、小<sup>せう</sup>に非<sup>あら</sup>ず、其<sup>その</sup>直<sup>ちよく</sup>徑<sup>けい</sup>ハ、二<sup>ふた</sup>萬<sup>まん</sup>七<sup>しち</sup>千<sup>せん</sup>六<sup>ろく</sup>百<sup>ひやく</sup>餘<sup>よ</sup>里<sup>り</sup>あり、其<sup>その</sup>周<sup>しゅう</sup>圍<sup>い</sup>ハ、八<sup>はち</sup>萬<sup>まん</sup>餘<sup>よ</sup>里<sup>り</sup>あり、地<sup>ち</sup>面<sup>めん</sup>を繞<sup>めい</sup>て、方<sup>かた</sup>里<sup>り</sup>よて、是<sup>これ</sup>を計<sup>はか</sup>れば、二<sup>ふた</sup>十<sup>じゆ</sup>四<sup>し</sup>萬<sup>まん</sup>一<sup>いつ</sup>千<sup>せん</sup>餘<sup>よ</sup>萬<sup>まん</sup>里<sup>り</sup>あり、設<sup>も</sup>し人<sup>ひと</sup>ありて、地<sup>ち</sup>面<sup>めん</sup>を周<sup>しゅう</sup>行<sup>かう</sup>し、一<sup>いつ</sup>時<sup>じ</sup>の中<sup>ちゆう</sup>ハ、二<sup>ふた</sup>十<sup>じゆ</sup>里<sup>り</sup>を行<sup>い</sup>ハ、一<sup>いつ</sup>年<sup>ねん</sup>にして、方<sup>かた</sup>に能<sup>よ</sup>く轉<sup>てん</sup>して、原<sup>げん</sup>處<sup>しよ</sup>に回<sup>かへ</sup>べし、中<sup>ちゆう</sup>國<sup>こく</sup>ハ、十<sup>じゆ</sup>八<sup>はち</sup>省<sup>しやう</sup>ありて、大<sup>だい</sup>は、大<sup>だい</sup>あり、然<sup>しか</sup>れども、地<sup>ち</sup>球<sup>きう</sup>一<sup>いつ</sup>百<sup>ひやく</sup>四<sup>し</sup>十<sup>しゆ</sup>六<sup>ろく</sup>分<sup>ぶん</sup>の一<sup>いつ</sup>あり、地<sup>ち</sup>球<sup>きう</sup>此<sup>こ</sup>の如<sup>ごと</sup>く、大<sup>だい</sup>ありと雖<sup>いへ</sup>ども、究<sup>きよ</sup>るよ、日<sup>にち</sup>を繞<sup>めい</sup>るの、一<sup>いつ</sup>行<sup>かう</sup>星<sup>せい</sup>あるの、一<sup>いつ</sup>行<sup>かう</sup>星<sup>せい</sup>は、日<sup>にち</sup>を繞<sup>めい</sup>るの星<sup>せい</sup>にして、常<sup>じやう</sup>行<sup>かう</sup>して、不<sup>ふ</sup>定<sup>てい</sup>に因<sup>よ</sup>りて、故<sup>ゆゑ</sup>に是<sup>これ</sup>を行<sup>かう</sup>星<sup>せい</sup>と

謂なり夫れ行星は大なる者八あり曰く水星金星地球火星、  
 木星土星天王星海王星あり此外は極小の行星、一百零九あり  
 諸行星の日は最も近き者は水星次は金星次は地球次は海  
 王星なり八大行星は地球より千有二百餘倍、  
 地球に較れば皆大よして木星は地球より、  
 土星は七百餘倍、海王星は九十餘倍、天王星は七十餘倍あり、  
 然とも日と地球より大あり、壹百二十六萬倍あり、日も亦渾  
 圓の體よして諸行星及び其所繞れ諸月を合せて以て日に  
 較れば仍ほ小なる、六百倍なり、日體は此の如く大なれとも、  
 人目にて是を視れば輪は似たり餅に似たり、其形の甚小なる

の地を離たる最も遠き故なり、諸行星の日を中心として、  
 軌道あり然とも其軌道は皆橢圓よして、平面なるは非ぞ、  
 且其日を中心とする遠近遅速は、同からずるあり、地球の日を距  
 る三萬一千八百五十萬里あり、天を運行し、一時辰は四十  
 七萬六千餘里なり、其餘諸行星の運轉するは、地に較れば速  
 なるあり、地は較れば緩ある者あり、天中の諸物、地と最も近  
 き者、乃ち月よして、其形も亦渾圓なる球の如し、若し千里  
 鏡よて、其面を窺へば、大なる平原高山深谷あるを見る、亦大  
 山ある地球と相同じ、江河洋海に至ては、在昔に有之し、から  
 んと雖も、今の是を今月の物たる、甚た大ならず、地は較れ  
 ば、小なる、四十九倍、日は較れば、小なる、六千一百七十四萬倍

なり、月體の日體より較れば、甚だ小なり、然るも見て其大小の  
 差、遠らざるの月の地を距るより比すれば、日の地を距るの三  
 萬一千八百五十萬里あり、月の動法、二あり、一は、毎月地の繞  
 て一週と、一は、毎月自轉して、一週と、地球行くと、月も亦隨  
 行あり、月と地の體は、皆光なく、日光を借て、是を返照せら  
 かり、故に朔、望、晦の同からざるあり、望日、地球の中は在て、  
 日と月と、東西相對し、月體地の半面は向て、全く日光は接し、  
 地は返照せ、故に、月輪を見れば、其光は、圓鏡の如きあり、朔日  
 は、月中は在て、地と日と、東西相對し、月體の日の半光あると  
 雖、自然とも、地の半面は向て、光なきなり、故に、朔日よりの、  
 月光を見ざるあり、月蝕に至ては、地中間は在て、其影、月面を

射る、其の月色を、遮蔽せらる故なり、月の望日、在て、若し其軌  
 道、地球の軌道と、平直なれば、必ず地影は蔽れて、其面、日光を  
 接ざるなり、是を、月蝕とす、日蝕の必ず、朔日なるは、乃ち月  
 の中間は在て、其影、地は射て、其面を、遮蔽し、人の影、掩の處は  
 在て、日光を見る能はざるなり、是を、日蝕とするなり、但、月體  
 は、地より、小にして、地體は、復日より、小なり、故に、月體、全地を  
 遮る能はざるなり、日蝕の久きも、亦四分の時より、過ざるなり、  
 毎月、皆、朔望あれば、究むるは、毎月、日月の蝕、あらざるは、何  
 ぞや、月球の軌道と、地球の軌道と、毎月、平直ある能は、時あ  
 りて、畧上り時ありて、畧下ればなり、是は、因て、其蝕を見ざる  
 あり、若し、其軌道、毎月、平直にして、月體の、地球と、日と、同一の

直線よして、毎月必ず蝕あらん、日月の交蝕の人多く、陰陽の厄會よして、人事よ於て、災戾ありとせるの天文を識らざる故なり、夫れ日月交蝕するの本と一定の期と、一定の理ありて、法を用て推算せれば、千百年と雖とも、皆預知る可きなり、俗語よ云く、唐の明皇嘗て、中秋の夜に、月宮よ遊ぶと又云く、后羿不死の藥を、西王母よ請しよ、其妻嫦娥、是を竊て、月に奔れり、是を蟾蜍とすと、此等妄誕の語、甚た多し、即ち空よ憑て、捏造せるあり、明智者の洞よ其偽なるを、知れる久し、愚人の、是を聽き、是を信するの誠よ、惜むべしと、地球を、只、一月ありて、是を繞れり、木星の四月あり、土星は、八月あり、天王星も、亦四月あれとも、人目見る能はざるの、其小にして、遠の故なり、若し千里鏡よて、是を窺ハ便ち、顯然たり、諸の行星以外に、更に日を繞る、慧星あり、夫れ慧星を、常星と異り、恒よ隠て、忽ち見れ、其光、或も甚た大なれば、人以て、災異として、是を畏る、然とも、今、慧星も、亦日を繞れる星よして、軌道ありて、循環せる、諸の行星と、理を同く、其隠たるも、眞の隠たるよ、非ず、地を距る、甚遠くして、見る能はざるなを、毫も、人事の興衰に、關せざるを、知れり、慧星も、大あり、小あり、日を繞る、幾年よして、一週ける者あり、亦數十年、數百年、數千年、數万年にして、始めて、日を繞りて、一週する者あり、其行甚た速よして、康熙十八年、一慧星ありしよ、計れるに、一時中に、八百萬里を行けり、又流星れ、日を繞て行き、其体最小にして、堅く、本其光おく、惟日を

三十一

繞り、時ありて、地、牽引せられ、空氣の中に射入り、熱を受ける、  
 過多にして、焚燒せらるゝ至て、便ら、其光を發せり、諸の行星、彗  
 星、流星及び行星の、所繞の諸月は、日と連屬し、合して、一團を  
 成し、日は、中樞に居て、是を統制す、故に其混亂を見ず、皆  
 其明光を、是を照し、熱氣を、是を温るを得るあり、此の一團の  
 外、尚ほ、恒星の、其數を計らざる有て、一一、皆日の如く、各行  
 星ありて、是を繞り、亦皆各一團を合せり、諸星を、大約二等に  
 分てり、曰く、行星曰く、恒星あり、日を繞て行くの、行星と名け、  
 日を繞て行ざるの、恒星と名く、人目にて、是を視れば、恒一  
 處に居て、動かさず、故に名て、恒星といふ、然ども、人眼よて、看て動  
 かざる如きは、遠に因ての故あり、是を究るゝ、皆是れ、旋轉

て、或は二星互に繞て行き、或は三星互に繞て行き、其互に繞  
 て、一週をるゝ、或は幾十年、或は幾百年、或は幾千年、或は幾萬  
 一年等、しうらざるあり、恒星の地を距る、甚だ遠く、其體も亦大  
 きなり、最近の恒星の、南門と名く、地を距る、六十六萬々々餘里  
 あり、即ち日の地を距るゝ、較れば、大約二十萬倍あり、日も  
 亦一恒星あり、己を繞の行星に、較れば、大と云ふ、及と雖ども、究  
 るゝ、他の恒星に、比すれば、亦大と算へざるあり、恒星の、日よ  
 較れば、其大、或は幾百倍、或は幾千倍、或は幾万倍等、ありざる  
 あり、然とも、人目にて、是を見て、他の恒星を、見して、大とする  
 の、較近の故あり、日の動法、二あり、一は、夫約、每二十五日は、自  
 轉して、一週をるゝあり、一は、天を運轉する、時辰は、十萬餘

里あり其の所繞る天文家より依れ公昂宿六の星なり且天中  
 一恐り大樞紐ありて日と衆恒星とは環繞するの諸行星  
 の日繞る如く一般ならん再者の許きの星團ありて蒼穹  
 散じ是を視れり白雲に似たるあり若し千里鏡を用て視  
 れり雲は非ずして實の無數の星光あるを知る天河の一帯  
 の人目よて是を視れり河の如し遠き故なり若し千里鏡よ  
 て是を視れり天河の衆星も亦能く一々星を測るべし惟一  
 種あり極精の千里鏡を用ると雖も一類一類を分つ能は  
 ず仍ほ白雲と相似たり或も最遠の故より或も其の星  
 氣となりて形を未成るより由なり道は是を星氣と謂て可  
 り以上も天地の大局を總論せるあり今此の萬千世界を何

よりして有るを問へり明は自造たるは非ざるなり亦自行  
 非あり是を究るは萬象の森列たる旋轉も息まど運  
 行も紊れず倫あり序ありて美大觀る可きは豈偶然なら  
 んや豈も大智の主宰經營して是を創造せる無らんや中庸  
 曰く日月星辰繫ると誰か實は是を繫くる若何して是を  
 繫るや而して能く是の如く天は昭なるや此の無數世界を  
 統合して真神の無限無量の一國を成るを自然の真神の尊  
 榮權智は豈人意の能く測量せる所ならんや聖經は曰く真  
 神の經綸の及ぶ可らず是を樂む者の必ず詳は是を究む又  
 云く真神哉上天の其榮光を顯はし穹蒼は其經綸を顯せし  
 人多く云く盤古も天地を分つと又云く盤古は首出て世を

御せる者なりと、此れ人の捏造せる語あり、孔子書を刪て、康  
 虞より斷てり、四書五經は皆盤古氏を載せざるなり、又丁南  
 湖曰く、司馬遷の史記は三皇を録せざるは、其茫昧稽なきよ  
 由れり、況や盤古と三皇前に在るをや、天地萬物の原真神の  
 造る所なり、此真神は獨一として、三なき至大の主宰、萬有の  
 真原よして、普天下萬國の人、是を崇奉し、是を頌美すべき所  
 なり。

化學紀畧

萬物の形狀品彙甚た繁し、今何者を以て其体とせし、並に何  
 法を以て是を成すと問んと欲せざるか、朱子曰く、只一個の陰  
 陽五行の氣滾じて、天地の中は在り、精英なる者の人となり、

228

渣滓なる者は物となれりと、此れ臆説なり、物に即て其質を  
 察するに非るあり、西方の格致諸學中は、化學あり、化學の大  
 旨は物の體質を察究して、萬物變化の理を知り、而して其異  
 同の故を辨ずるを得るなり、化學家は臆説を逞とするは非ず、  
 調和交感の法を物に加へ、是を分ち、其純一の原質を得て、是  
 を合せて、庶類を化成するあり、若し此化學の工夫を用ゐざ  
 れば、氣の氣たる故、水の水たる故、木の木たる故、石の石たる  
 故を知る能はず、惟化學よ明なる者能く其故を知るなり、試  
 よ物を取て、其由來を察すれば、是の純一よして、雜なき者あ  
 り、是の數種合成せるあり、金銀鐵炭、養氣、輕氣等の如きは各  
 一質を具たり、水に至ては、二質を含み、糖は三質を含み、礬も、

四質を含み、卵白も六質を含めり、今世間の萬類を察すれば、  
 是の六十餘の原質配合して成れるを知るあり、物を格ずる、  
 猶ほ未だ盡きされば、敢て其數此より止ると謂はざるあり、此  
 の原質の分て金なる者となく、非金なる者とあすべし、金な  
 る者の四十九あり、非金なる者の十四あり、此の六十三の物  
 なり、皆純一よりして雜なり、中國乃、二氣五行を以て、萬物を化  
 生せとせざる非なり、行の止五あるのみならず、此の五行中  
 よりも、盡く純一にして、雜なき物あらざり、水、火、木、土、四行の各數  
 質ありて成り、水の養氣、輕氣の合成にして、火は養氣、炭氣の  
 合成なり、木の養氣、輕炭の三氣ありて合成し、土も分て數とな  
 す可し、惟金の純一にして、分を得ず、只原質と謂ふべきもの、

何を原質と謂ふ、曰く、質といふ本と純一よりして他質の相雜る  
 なく、煅鍊して試ると雖とも分て化すべき無しとせ、譬は水  
 の輕養の二氣の合成あれば、水を原質と言ふ能はず、養輕  
 の二氣の各純一よりして雜なく、復分つ可らざるより屬は、故は  
 是を原質と謂なり、此六十餘の原質中より、常用る者と十三  
 あるのとなり、動植の諸物より及で、四質を用て、是を成せり、  
 曰く、養氣、曰く、炭氣、曰く、淡氣、曰く、輕氣なり、更は、硫、磷、鹽、氣、鐵、  
 液、灰、精、鹹、精、石、精等の類を用るあり、凡そ植物の花、葉、動物の  
 骨肉、此の幾質の化合して成るに、外ならず、若し養炭、淡、輕  
 の四質、何を能く、多類を生ずると問はば、曰く、其相合して、交  
 感變化の萬殊あるは、四畫の參差配搭して、能く多字を成る



如く、或は一畫を増し、或は一畫を減ずれば、即ち別字を成せる、工字の頭を出せば、土字をなし、土字一畫を増せば、王字をなし、土字一畫を減ずれば、十字を成せたり、若し位置を變易すれば、又別字を成ず、土字の上の一橫長ければ、士字をなし、三字の一橫一直を作せば、工字をなす、此十六餘は、原質の萬物を配成するに、増減の法ありて、位置を變易せるの法あるに、畧筆畫相合して、字を成せしに、撇點橫豎、襟鉤轉挑、數萬字を分合配搭するに、應用窮なきあり、又西國の二十六字母も、配合して、數萬言を成けり、蓋し原質の配合も、皆不易の分量あり、水の如きは、是れ養輕の二氣、化合して成るなり、其分量を按ずれば、九分の内は、養氣は一、輕氣は八ありとて、天空の

氣は、養淡の二氣、攪合して成り、百分の内は、淡氣は七十九、養氣は二十一あり、原質の配合は、分量恒ありて、確乎とて、變ぜざり、若し其分量を減じて、是を去れば、物を成さざるあり、若し其分量を増じて、是と多くせるも、物を成せる後、必ず餘者あり、然く各原質の、皆微妙より、由て、積成せるあり、何を微妙と謂ふ、曰く、若し原質の一を取り、是を分て、又是を分てば、分なきは、至るべし、此の質の、至少なる者に、して、所謂微妙なり、各質の微妙は、至少なる、人目の見ざる所あり、是を究るに、形體あり、分量あり、定限ありて、格致家も、亦能く其輕重を權り、其大小を度るあり、若し微妙の相合して、物をなせば、何を以て、是を以て、然らしむると、曰く、微妙の、一一に、愛惡の力、相吸ひ

相拒るの力並に交感の力あり若し同類相合し小を積み大を成し其成れる所の物は純よして雑なく變化を爲す所なく、礦氣れ凝結して、礦とある如きは質の純なる者なり、若し異類配合交感せば形を變り性を易て他物を化生せる、養輕の二氣配合して水を生じ炭、輕養の三氣配合して糖を成し、養輕炭淡の四氣配合して肉を成し、乳を成し、血を成せば質異なる者なる如し、物に堅硬流動虛浮あるの皆其相吸ひ相拒むの力よ因て然なり、吸力の拒力に勝し堅硬となり拒力の吸力に勝し、虛浮となり、吸拒相均ければ、流動とあるあり、其の所惡の自然よ相拒む、其の所愛の自然よ相合せるなり、又光火電此三は皆能く物をして變化せしめ、此三者偏く萬物

よ透て、或も隠れ、或も現れ、是をして性を易へ、形を變せしむるなり、物の體質の或は堅硬ある、或も流動なる、或も虛浮なる等は、多く熱の主るよ因て感ぜるなり、草木の生長は、多く光の是を主るなり、微渺の分合變化して空よ憑り、體を結ぶは、多く電氣の是を主るよ因なり、若し輕養二氣を以て、玻璃瓶れ内よ實て其口を塞て、是を搖るに、水を成せ能はず、試し火を入れば、爆烈して、聲を作し、而して水を成し、再び金一塊をもて、試し火に鎔せば、其微渺の質をして、流動せしむべし、再び火を益せば、愈々微渺の質をして、遠く離れ、昇て、虛浮の氣とならむ、諸物皆然り、要するよ、微渺各其能其性ありて、彼此交感して、相吸ひ相拒み、以て萬物を成すなり、然とも

萬物具ると雖とも若し措置れ工各其宜を得されハ萬千世  
 界森列運動して此宇宙の大觀を成し能はざるなり設と寰  
 區の内は只一物あれば便ち滯て活せざるなり物二ありて、  
 始て交感牽涉あり物愈多ければ交渉愈大なり物々の措置、  
 恰當なれば方は運轉して窮まらず生々として息まざるなり、  
 天地萬物の原質大畧此の如し其配合交感物を成せの力も、  
 亦此の如し措置の工の最要たるも亦此の如し試は此の原  
 質何よりして有り其愛惡吸拒の力何よりして生じ微妙性  
 と其分量と如何にして具り誰か物々を措置して合宜なる  
 やと問はゞ其偶然は非ざるを明なり譬ハ永字八法の配搭  
 して數萬字をかゝ西國の二十六字母の數萬言をなす如し、

此は因て書を成を書何を止は萬々ならん此書此字自然は  
 して有は非ず必ず人の是を肇造せるあるなり六十餘の原  
 質用て萬物を成せも亦自然にして然るは非ず必ず大智慧  
 大能力の造物主是を肇造し是を主宰し是を措置せるあれ  
 ばなり微妙の大小の眞神是を定め原質の性力の乃ち眞神、  
 是を賦せるなり某質の某質は宜きは眞神の是を妙合せる  
 なり萬千の世界は皆眞神乃是を排列せるなり人あければ、  
 一字一書を成を能はず何を況や天地萬物をや若し眞神の、  
 萬物を創造せるの故を問はゞ曰く其仁愛を顯をなり眞神、  
 生を好の徳あれば萬物を造て是をして各其福其樂あらし  
 めんを願ふなり眞神は惟匠心を由て萬物を造るに非ず亦

仁心をもて是を造れるなり萬物の形體を察するよ各善意の在るなり五官四体及び内の腑臟等は各相宜く一々恰當にして其法妙ふらざるあく其用合とざるなし人の如き身體の内器官骸甚た多く肌膚甚た多く腦氣筋血管甚た多し是を究るよ皆用あり骨と骨と相擦と管と管と相雜り肢と肢と相損とるなく配搭して一の完固美善れ體を成せり諸物皆然り此外よ凡そ血氣ある者は皆食ふ所あり或は肉食或は穀食或は草食各其宜に従ふ眞神と衆食を備て人物を養ひ毫も吝惜せず綽然餘あり且は物々皆披体の者ありて或は毛羽或は鱗甲各適宜を極む人は天生の衣体を蔽ふなしと雖とも眞神備るよ裘葛絲綿あり又其聰明を賜て物

類よ超出各料を取て製して衣裳とあさむ山海に至るは廣く珍奇の物を出して人の把玩よ供と又金石木煤等を出して人の用を足す皆眞神預め此備をなしたればなり試よ思へ耳目鼻舌と各所喜所好あれば眞神は備て禽鳥の好音山水の清景花卉の幽香烹調の美味以て是を娛むるあり若色と只一色香と只一香味と只一味ならは人の體完く食用餘ありと雖ども其喜樂猶足らざるあらん再び思へ四時定序なく晝夜運行常度なくは人何を以て堪んや然ども日月星辰より地球よ及まを其大小遠近皆永く定て易らざるの分わり所行の道皆萬世變せざるの量わり其循環運動差謬あらざる故よ時序迭よ更り寒暑相推と日の出入する

皆常ありて、一、錯亂あきなり、空中呼吸の氣を、養淡の二氣、  
 攪和して成り、一百分の中は、淡氣は七十九、養氣は二十一、  
 して、多寡相稱へり、若養氣其分量を過れば、火氣太だ重く、是  
 を吸ハ、熱を生じ、生を傷ム至るなり、若其分量及ばざれば、  
 火燃ゆる能ハざ物生ずる能ハざるなり、配合當を得て、始て  
 人物ノ利あるなり、人は身体を除て、復至寶の靈魂あり、身は  
 小體なり、魂ハ大体たり、此二体合して、人たれば、亦其相宜を  
 極むるなり、若し人魂を禽獸の体ノ加へは、大にして合さ  
 らん、人魂は、衆理を具て、萬事ノ應ずれば、必也、人体を其用に、  
 當るなり、宇宙を、宮室の如し、人の其中に居るは、主人の如く、  
 萬物を、其用に充るなり、天を覆ひ、地は載せ、日月は、照亮し、物

各其美を具へ、名其宜を得て、並ニ彼此相宜く、皆人に益ある  
 なり、實に真神の仁慈、天下ノ溥きあり、若し其至仁に非んハ、  
 安ぞ能く、如是ならんや、然ども曠く、世人を觀る、憂を懷き、  
 難を被る者多く、反て鳥獸の怡然として、自得するに如らず、  
 此ハ何の故ぞ、真神の不仁ニ因るに非れば、人の罪あるに因  
 るあり、真神の心を、其心となさき、真神の道を、其道となさ  
 ければ、故ニ内は常に戚々として、外は常に岌々たり、罪は萬災  
 萬禍萬憂の根たり、是を拔けば、人心は安く、天地を位して、萬  
 物育す、然く人罪ありと雖ども、真神の仁、更ニ顯はる、即ち救  
 主耶穌を降生して、人ノ代て、罪を贖はしめ、又其全聖全善の  
 神を賜て、人心を感化し、是をして天良を重活し、真福を無窮

に享るを得しむるなり

救世の真主

大初の世は、真神の人を造らんと欲せしむるに當て、先づ天地萬物を造り居處する所と、養育を得せしめたり、萬物既に備て、遂に人を造り、一は男一は女、男をわたむ、女をゑる、と名け、天下萬國人の始祖なり、其性を本善にして、其身は全く病患なかりき、且つ真神授くるよ、真道を以てし、一の禁令を立て、以て其心を試み、是を守れば生じ、是を犯せば死せりとせり、惜くは、始祖邪魔に迷惑せられ、禁に違ひ、命に逆ひ、天真を喪失せしかば、萬世の禍患、此よりして生じ、蓋も彼既に罪を犯たれば、真神の公を秉り、義を行て、罰するに、疾病死亡、身魂保

つ莫きを以てせり、始祖の性、本善を失て、其累子孫に及び、惡性を傳染し、後世の人、其覆轍を蹈み、一も真神の法を犯さる者なきも、幸に真神の仁慈、世人の死地は居るよ、忍びざる有て、始祖よ、其の後裔よりして、救主を出し、己を捨て、衆を贖ひ、確信せる者をして、沉淪を免れて、永生を得を許せり、試みに問ふ、救主の誰なるや、曰く、真神、獨生の子、耶穌なり、真神は、乃ち三位一體にして、聖父、聖子、聖神、是なを、耶穌と、其第二位の聖子なり、此聖子は、聖父、聖神と、永遠共に在り、所定の日に至て、降生して、人と爲れり、其の降生の時は、即ち漢の平帝元始元年、其降生の地は、西方、猶太あり、曰く、耶穌の母は、まりと名く、父は、世父に非せ、即ち真神、其れ能力を以て、童女を感

動して生り、耶穌は兩性あり一は眞神にして、一は眞人なり、此の二者を合て、獨一の救主とす、問ふ何を以て、耶穌を眞神の子にして降生して人を救ふや、曰く、其據三あり、一は預言を據とす、即ち、耶穌降生の以前先知の聖人、眞神に默示を受けて、直に救世者の出んとするを言ひ、并に其の何地何時に生れ、生平の言行は、若何あるや、終に身を捨て、人罪に代贖ふ等の語を並記せり、諸預言は舊約に載せたり、諸先知は耶穌の前數千年、千餘年、數百年の人にして、主の降生に及で、應驗せざる、無りとなり、一は、異蹟を據とす、主の異能は、悉く數ふべからず、惟新約の所載の者、於て是を略述ぶれば、耶穌口を一啓き、或は手を舉れば、啓をして見、又、聲をして聽き、類を

て、深き、跛をして行か、しめ、百病も、是を醫せれば、即ち愈たり、且能く鬼を逐ひ、邪を驅り、風を平し、浪を息め、死を起し、生を回し、五餅二魚をもて、數千人に食ゆじめ、而して尙餘剩有り、然、耶穌の是を爲たるを、人をして、異と驚き、奇と稱せしむるも、非ず、二意あり、一は、其の愛人を、その心を顯へ、一は、已は眞神の子あるを、証明せるあり、當日、其徒も、亦能く異蹟を行へり、是を行へる、其權を究れば、皆主の所賜に由れり、主の自ら全權あり、故に、異蹟を行へる時に、主を只云く、我肯んぞと、其徒の、主名を頼て、而後、能く行へり、或は疑、耶穌の所行は、幻術に近く、障眼の法ありとぞ、曰く、凡そ上載れ、諸事ハ、游戲の擧、非ず、人死して、四日あるも、其をして、復生せしめ、

或ハ四十載の長き、聖賢なる者を能く視聽せしめたる一言  
 を用て、即ち驗ありとて、確たる明証あり、豈幻術あらんや、猶  
 太國中、主を害せんと欲せし人も、皆其異蹟を行主の事候  
 甚實あるを、知むかば、故に敢て其非ざるを、言はずして、惟証  
 主の鬼主に頼て、是を行ふのみと云へり、但主の言行は、魔  
 鬼を敗て、人を救んと欲せしは、非ざる無れ、彼鬼主の決意で  
 主を助て、以て自ら害せざるなり、若し耶穌は、是れ人あり、且  
 と觀は、其の所爲を、奇とせざるを得ざるあり、然とも方よ其  
 識見を、廣くせれば、便ち明悟して、而して、此を以て、奇と爲さ  
 る可し、主の全知全能の、眞神なれば、萬物の、奇異、行ふ難き事  
 あらざらん、本と眞神の、所造なれば、既ち死んで、復生せむむ

る、何ぞ奇と爲るよ、足らんや、海風も、亦眞神の、所造所管あり、  
 風に止れ、浪よ平なれ、と命ずる、何の難き有らんや、二は復生の  
 本事を以て、據とせ、主の、未死の時、死して三日に於て、復生せ  
 らんと、預言玉へり、後果して、其言は應せり、此れ至大の憑據お  
 り、若し眞神の子に非ずして、其子と妄稱せば、上は眞神を瀆  
 せしむ、世人を誑くなり、惡極なり、眞神決して、其を以て復生  
 せしめず、其惡を成さしめざるなり、主の、生命の源なり、何ぞ  
 能く、死關の所扼あらん、人の死せる、皆罪の爲よ、して、死を  
 るあり、主の死するは、甘願て、人よ代り、罪を贖て、死せよ、あり、  
 何を以て、是を知る、其復生を觀て、是を知る可し、復生の後、四  
 十日を歴て、白晝よ、天に昇れり、又至顯至妙の、據よ、非ずや、或



と曰く一千餘年若し果して其人あり果して此の事あらば、  
 便ち信ずべし但恐くハ情ある無きは同く或ハ附會訛傳は  
 出た曰く主の履歷言行ハ備は聖經の新約中ハ載せたり耶  
 蘇の時より今に至るまで世を歴て流傳じ逐句可考あり其  
 徒たる者固く守て變せざ一字と雖ども敢て臆を違じて増  
 減するおし且つ此道ハ天下各國ハ流行じ毎禮拜日ハ靜  
 敬後なる教友皆聚り讀み教師の宜講を聽なり故ハ昔より  
 今に至るまで聖書の註解甚だ多し別ハ教外人の書述の中  
 にも亦嘗て耶穌降生の事を言へるあり皆新約の證と爲る  
 足れり今の西人の詳は究めずして驟は信ずるハ非ざる  
 り西人の凡を事物ハ屬する者ハ心を悉して窮究せざるな

天文地理格致諸學の如き精益求精を求めれば救人の大道は  
 於て安んずる實事を求めざるを得んや今遍く經史を稽れ  
 ば一千八百餘年前ハ實ハ耶穌ありとを知るを得るあり聖  
 善にして疵なく諸の異跡を行ひ其の所傳の道ハ天の潔が  
 如く意完善にして毫髮の謬誤なく十字架は死に三日よじ  
 て復活し四十日よじて天に升れり人よじて此の如きある  
 り眞神の子の降生せるに非ずして何ぞや問ふ耶穌若し眞  
 神からば何ぞ自救はざるや而して且人と爲り絲毫も無罪  
 人何爲ぞ是を害せしや曰く主の十字架に死せる人ハ  
 定意あれば眞神も亦定意あるなり人の意ハ私を逞くして  
 人を害せんとせり眞神の意ハ即ち人を愛して至大の救法

を成せり、主の甘しで、身を捨るを願入るよ、至ては嘗て、自ら  
 去る父の、我を愛せよ、我が、生命を捐て、復生をよ、因れ  
 り、我命、人の所奪に非ず、我を、父の命を、奉るべあり、人間  
 人の、私を、害す、主を、害する、は、究る、是れ、何意あるや、目  
 く、主意あり、一、人の、主心、は、合はせ、主よ、責られ、而して  
 悪生、せむ、あり、盗賊の、恒、陽光を、惡み、夜出で、晝伏せるよ、  
 譬ふ、べし、日の、美、あさるよ、非るあり、若輩の、邪暗の、行、利  
 ならず、され、あり、主の、光の、世に、闇む、が、如し、而して、人の、惡を  
 作る、暗を、愛する、光を、愛する、より、過ぎたれば、なり、主曰く、不  
 善者は、光を、惡む、光よ、就かき、所行の、責を、受んを、恐れ、て、なり、  
 真理よ、從ふ者、の、光よ、就て、其の、所行を、彰はす、即ち、眞神に、遵

て、行へ、なり、と、古今來、方正よ、して、容られず、邪曲よ、して、公  
 を、害せるもの、指、屈す、に、勝へ、孔子の、如き、帝王の、道を、明  
 して、時君の、聘、應、下、樹を、宋よ、伐り、迹を、衛に、削り、商周は  
 窮し、陳、蔡、の、圍、まれ、屈き、季氏よ、受け、陽虎よ、辱められ、戚々、然  
 と、して、死、至れり、死して、萬世の、名あり、と、雖、も、生に、一旦  
 の、歡を得、ざり、き、何ぞ、況や、全聖、全善の、救主、此、惡世よ、來て、能  
 く、難、免れんや、一、耶穌、必、來るべし、死を、先知の、言へるよ  
 由て、猶、太人の、其、來るを、或、の、郷相と、なり、或、は、君王と、あり、て、  
 猶、太を、振興、して、盡く、及、び、諸敵の、手、振り、脱、して、萬國の、  
 首國、た、ら、んを、望、めるあり、然、れ、耶穌の、來、推、る、一、國を、救  
 め、んと、欲、せ、し、よ、非ず、天下の、萬、國を、救、え、と、なり、一時の、王

あるんと欲せむに非は、天下の萬々世の王ありては、城を  
 争ひ、地を争はんと欲し、干戈を動かさんと謀るに非は、其  
 身を捨て、衆人の罪を贖となり、而して眞道をもて、人を化し、  
 其國を世に屬せしめて、人心に管じ、人靈を救ひ、永く眞神國  
 の王たりとなり、故に其威其權も、亦世王より同らざりたり、  
 ゆたやの官長祭司、其の卑小謙虚よして、王者の相あきを見  
 て、我等の所望の救主に非ざるとか、其人を輕じ、其語を蔑し、  
 遂に其道を愛せずして、是を厭棄し、衆口紛騰として、其身を、  
 十字架に釘せしめたり、彼時ゆたやの軍制、ローマ人ローマ  
 着祭司長老は、匙を引て、其衙署に至らば、本意是を  
 釋さんと欲し、訊て後よ曰く、我は此人の罪なきを觀ると、衆

聞て服せ、釘死せ、其靈呼せり、曰く、民情は佛の難く、衆  
 人對し、水を取り、美を流せ、齒を義流せ、血を流せ、我罪は非  
 ず、此は由て觀れ、人主は死せるは、國法を犯せるは、非は、  
 外に人の罪絶せ、故に後で死せるは、然るも、生は、自救ふ  
 能なきは、非は、萬々萬世の人民を救はせ、欲せし爲は、  
 故に、自云く、我は來るを人を彼に、非は、人よ、役せ、  
 而して生を捨て、衆の爲め、贖ふなると、○耶穌の眞身を成  
 國に降世せ、有るの要意あり、すは、自身に在りて、眞神を顯は、  
 人に看せ、心も、眞神の眞體、形を、  
 眞神の眞神の光華を顯は、其質は、有りた、  
 眞神を看たるを、眞神の眞體、根たるは、  
 眞神の眞神の眞體、根たるは、

真神の公義に照らすを、是を罰す。地獄に落ち、永く  
 沉淪を受く。然るに、真神の仁愛を照らす。人を救ふ。天堂に  
 登入て、福樂を永享す。人のため。地獄に落ち、永く  
 救はれ。是れ公義を成す。あり。律を按じ、罪を定す。父と  
 愛は、少くも、真神を、仁を捨て、義に従ふ。能く、亦、義を捨て、  
 信を、從ふ。能く、仁義、兩全に、す。必、父と、代贖の法、わ  
 るを、要す。楊、繼盛の、妻、夫の、刑、代、自らを、救ふ。海、所、意、の、  
 父の、罪、代、代、願、する、如く、但、國、法、を、犯、せ、か、人の、或、り、代贖  
 する、父、も、天、法、を、犯、せ、る、人、の、代贖、も、能、く、ある、あり、大、皆、罪、亦、  
 然、は、真、神、の前、に、在、る、大、皆、是、犯、人、也。以、て、彼此、相、救、す。能、く、さ、る  
 に、因、て、必、無、罪、の、人、あり、代贖、亦、人、代、贖、亦、

可憐なる人、身入を、贖ふのみならず、一人、何を、能く、萬人、は、代贖  
 得、然、る、只、耶穌の、至、聖、なる、罪、も、天、父の、愛、子、也。なり。至  
 尊、至、貴、なる、能、く、天、下、を、今、の、代、贖、ある、のみ、なり。耶穌  
 主、感謝、を、昔、心、情、願、は、天、上、の、榮、光、を、捨、て、世、に、降、臨、す。天、と、  
 り、人の、所、不、守、法、を、守、り、三年、の、餘、真、神の、真、道、を、民、に、教、へ、真  
 神の、善、徳、を、も、て、人の、榜、樣、を、作、り、且、つ、廣、く、異、跡、を、行、す。其、愛  
 心を、顯、し、後、十字架、の、上、に、在、り、身、を、捨、て、世、を、救、ひ、魔、鬼、の、權  
 を、破、り、死、亡、の、勢、は、勝、ち、功、天、地、を、蓋、ひ、德、古、今、及、於、是、也。  
 以、て、天、下、の、人、民、凡、を、耶穌、に、信、頼、も、て、救、を、求、め、其、耶穌、必、ず  
 能、く、是、を、救、ひ、あり、人の、所、可、受、の、刑、は、耶穌、に、代、り、受、玉、入  
 り、故、に、真、神、救、主、の、代、贖、の、功、に、因、て、人、罪、を、救、ひ、ん、を、願、す。

むらんと欲せむに非ん、天下の萬々世の王ありては、城を  
 争ひ、地を争はん、と欲せ、干戈を動かさんと謀るに非ん、其  
 身を捨て、衆人の罪を贖むなり、而して眞道を布て、人を化し、  
 其國を世に屬せしめて、人心に管じ、人靈を救ひ、永く眞神國  
 の王たり、なかり、故に其威其權も、亦世王より同らざり、あり、  
 ゆたやの官長祭司、其の卑小謙虚よして、王者の相おきを見  
 て、我等の所望の救主に非ずとふ、其人を輕じ、其語を藐し、  
 遂に其道を愛せずして、是を厭棄し、衆口紛騰として、其身を、  
 十字架に釘せしめたり、彼時ゆたやの軍制、ロー人ロー人  
 者祭司長老を見て、主を引て、其衙署に至らしめ、本意是を  
 釋さんと欲し、訊て後よ曰く、我は此人の罪なきを觀ると、衆

聞て服せし釘死せ、其聲を呼せり、世に眞情を拂ひ、難く衆  
 衆對し、木を取り、手を洗て、固く義氣は、血を流せ、我罪は非  
 ずと、此の由て觀れ、人主此死せるは、國法を犯せるは非ん、  
 然れ、人の願絶せ、故に世で死せるあり、然るに、主は自救し、  
 能なきあり、非ず、萬々萬世の人民を救はん、と欲せ、爲り、  
 故に、自ら我を來るを人を彼に非ん、人よ役せ、死して、  
 而して生を捨て、衆の爲め、贖むなると、○耶穌の眞身を成  
 せ、降世せる三の要意あり、一は、自身に在り、眞神を顯は、長  
 久に看せ、二は、衆を眞神の本體に、形を顯、像を畫、三は、世  
 界に降世、眞神の光華を顯ひ、其質を肖り、た、眞神を看せ、是  
 れ眞神を看たるなり、眞神の唯萬物に、根たるのみ、非ず、亦

萬德萬福の根なり、人よして、眞神を離るれば、其徳必ず衰ふる。枝よして、樹を離るれば、其汁貫通せず、其枝必ず朽る。亦如く、人の徳あるを欲せし、實は眞神を親ざる可らざる。故に耶穌自身は在て、眞神を顯はして、人よ看せしめ、人を以て是と復親み、其徳を興さしめんとして、救人の要事を爲せり。眞神の眞道を傳ふるあり、人世の皆暗昧よして、必き、天土の光をもて、是を照亮すれば、便能く得救あり、或曰く、儒釋道の三教も、亦眞神の道たるは非ずや、其道何を足らざる有んぞ、曰く、三教の人心より想出せるもの、是も、錯誤あるを免れざるなり、其中眞理ありと雖も、不足の至なり、且つ既に人より來れば、其言權なきなり、必ず眞神親來て、道を傳

れ、方よ能く錯ち、至足よして、權あるあり、此れ皆耶穌に在て、是を成せり、亦人を救ふの要事なり、其十字架よ死んで、人の罪よ代で贖へるあり、世人の皆獨りよして、立無き、高天の天主宰、眞神を敬事して、而して其誠を守り、其命を遵ふべきは、奈何ともする無む、世人叛逆して、眞神の生成せる恩を忘れ、而して、是よ奉むを事とせずとて、反て人の自立たる、假神を敬事し、罪大よひて、惡極れり、譬へ、臣子たる者、皇上に敬事せずして、反て盜賊よ、敬事せるなり、子女たる者、父母に敬事せずして、反て他人に敬事せるなり、極刑の處治を被るど雖も、猶其罪を盡すは、足ざるなり、況や、人を眞神に敬事せざるのみは、非き、更よ心を虧き、人を損へる、諸の罪惡あれ

其神の公義に照らさるるは是を罰す地獄に落ち永く  
 沉淪を受くべしなり真神の仁愛を照らさるる人は救はれ天堂に  
 登入て福樂を永享すべしなり律を按じて罪を定む又仁  
 愛は是れ公義を以てあり律を按じて罪を定む又仁  
 愛は少くも真神の仁を捨て義に従ふ能はず亦義を捨て  
 仁に従ふ能はずなり仁義兩全にして必らず又代贖の法  
 るを要せり楊雄盛の妻夫の刑を代らんと欲す然るに  
 父の罪に代るを願はざる如く但國法を犯せば人の或り代贖  
 ぶべきは天法を犯せば人の代贖ふ能はずなり大皆罪あり  
 是は真神の前には在る皆是犯人にして彼此相救ふ能はず  
 此因てなり必ず無罪の一人ありて代贖るべし人代り贖ふ

可きも一人一人を贖ふのみならず一人何を能く萬人を代贖  
 べしなり只耶穌の至聖なるを罪なく天父の愛子となりて至  
 尊至貴なるを能く天下古今の人は代贖あるのみなり耶穌  
 感謝して甘心情願して天上の榮光を捨て世に降り人とな  
 り人の所不守法を守り三年の餘真神の眞道を民に教へ眞  
 神の善徳をもて人の榜樣を作り且の廣く異跡を行はれ其愛  
 心を顯し後十字架の上にて身を捨て世を救ひ魔鬼の權  
 を破り死亡の勢は勝ち功天地を蓋ひ徳古今に及べり是を  
 以て天下の人民凡そ耶穌に信頼して救を求め耶穌必ず  
 能く是を救ふあり人の所可受の刑は耶穌に代りて受玉へ  
 り故に真神救主の代贖の功は因て人罪を救ふんを願ふ

而して罰を降さず其の日後に靈魂を以て地獄の永刑を免れ天堂の永福を享けしめて仁義兩全なり此の眞神の特立たる救世の法なり人必ず此法に遵ひ眞神に敬事して主宰と爲し信じて耶穌に靠て救主と爲せば方其靈魂を救ふ可也耶穌を除て別は救主の世を救ふ可き無し故に萬民の皆眞神の厚恩を謝し耶穌の盛徳に感して是に歸服すべきなり若し救主の仁愛如此の大なるに非ずば焉ぞ肯て身を捨て人を救んや奈何せん中國に人あり耶穌を鄙棄し耶穌を錯認して外國人と爲し其道を聽くを屑とせざれども耶穌のニが國に隆生せるはアジア洲に在て中國と同じく一洲に中ま在を知らざるあり今の傳教士はエウロパ洲ア

メリカ洲の人多きは居れり洲既不同何ぞ耶穌教を傳ふる者の其國を偏護するありと云を得んや耶穌を中國の人に非せ亦外國人にも非るなり實に天より來れり天下獨一の主なり嘗て華人に聞く謂く己は靠て善を行ひ以て救を得べしと嗟斷々として能はざるあり知るべし天下に一全善の人なれば誰か敢て我が一生眞理に合せて一毫の錯なしと言はんや縦ひ能く其罪を禁んで外に發せざるも斷て其根を絶て心お留めざる能はず凡そ一惡念心も動くわれバ即ち是を罪と云ふ以て人を陷て地獄に下すも足れり譬ば人あり國法を犯すと一次なるも官府必ず律を按て罪を定むるなり況や我等一世の所爲は其罪邱山の如



きを、自己に靠て、善を行ひ、救を得る事を望む。聖人の  
 海に落ちたる如し、他人の救は、靠されば、命を保ち難し。此  
 罪中、自に陷て、自に能く脱離せんを、故に必ず、眞神、世人を  
 憐れむ、獨生の子を遣はし、降生して、代償のトなる。尤も、救  
 人の要事と考へ、人々に勸む。意味は、己に靠る可き、考へず、  
 專ら、耶穌を信せよ、至寶の靈魂の救を得、且、後、同く、永福  
 を享べん。切に此論を、藐視する勿れ。さすれば、天に下り、  
 一重生の道を得ず。聖人の出づる所、此の道に非ざる。行ふに、  
 耶穌の天より生て、備へ難苦を受け、十字架に死せしむ。大罪  
 を償ひ、天路を開通し、信者をして、救を得、天堂に入らしめ、  
 心と要事とを、此は、最要の事。雖も、仍、此の事の外、を、耶

ざるあり、即ち、眞神の、人心を感化して、其天長を復活せしむ。聖  
 り、耶穌の、人々に代て、死を受け、贖罪の道と謂ふ。天堂は、明潔  
 の所なれば、昏暗汚穢の人、入るを得ざるなり。死後は、各人必  
 ず、自己の、地方、各人の、心と、所合の、地と、到るなり。心明潔なれば、  
 明潔の、天堂に入べく、心汚暗なれば、汚暗の、地獄に入らば、  
 尙も、惡人を、推して、天に、升らむ。但、天堂を、汚せのとは、  
 非也。且、天堂の、永福を、彼等も、亦、享る能はざるなり。其心、此合  
 はざるに、因せなり。故に、眞福を、天上に、得んと、要せば、必ず、生  
 前、眞神の、其惡を、化せるを、求て、而、且、後、可なり。人初て、  
 生たる、惡根の、心と、在る有て、特に、外に、發せざる。始て、能  
 く、言ひ、能く、行ひ、日に、及せ、其驕妬貪悍、一切の、惡意、齋顯れる

な復或問ふ此惡根何よりして來ると答ふ始祖亞當より傳  
 下せり又問ふ人の初性本善なりと此言是なるや答て是を  
 復否あり是を以て眞神人を造れるの始より其性不善あら  
 ざるやを論ぜれば凡そ人の初生の性より一善なきあり此  
 其由て此を観れば性の本善なる者は乃ち眞神の始て人を  
 造らざるとき其性全善なりとて言へるあり但始祖亞當魔は惑  
 はれ眞神の命は逆ひ善變じて惡となり其兼稱の良の味く  
 を由て其天賦の性は不善に移りてあり萬族の一脉は本き皆  
 亞當より出る所あり始祖の性既變じて惡を爲りてなら  
 ば凡そ人の一類の皆其惡根を承て世代相傳りたり故に稟  
 受せる所の者の眞神の始て造れるの性に非ず乃ち是れ魔

に惑べたるの性なり惡根は惡苗を發するに因て故に天下の  
 人日よ想ふべからざる所を想ひ言へみらざる所を言ひ行  
 我からざる所を行ひ罪惡越積者越深く世道人心問ふ可ら  
 ざるなり人心は本邪なる本壞たる憑據甚た多し惡事を行  
 の自然は出るは水の流下る如く善事を行の甚た勉強を覺  
 ゆるは氷の逆流する如きなり語は白く善は從ひ登る如く  
 惡は從ひ崩る如しと是なり孔子は道の不行と言へる無知  
 の歎ある又徳を好む色を好む如きを見れば道行れば人を徳  
 を好まざると言へるは道德の善らざるは非也人心は道德に  
 合ざるを言へるなり此も心の邪壞とされる實據なり問ふ  
 是非の心を人皆是れあり既ち是非の心あらば何ぞ是を邪

壞美謂を得んと答ふ心の病正し此ま在り是非の心かけれ  
 己を有るハ其非を行を好て其是を行せず罪に非ずや善  
 を知て是を爲を願はず惡を知て必ず是を爲んと欲む故に  
 犯すを明し知らず心の邪壞せるありと謂ふを得んや人性  
 は智あり情あり志あり此の三者能く全くと良心の管下に  
 在て各其位を得れば發して皆節に中り往として天命は合  
 のさる無あり此を性善と謂なり惜哉世は此人無じ人皆爲  
 惡の易く爲善の難きを覺らば性其正を失へるに非ずやと  
 問ふ五常の性も具らずや若し性は具らば何を不善と謂を  
 得んや答ふ五常は人具はれとも惜くば是を用て當らざる  
 な外如し鍾表既に壞れ其輪軸等の料皆全き其機の微損

せるは因て時を按ひて動く能はざるあり其料全料なりと  
 雖も鍾表とすれバ用なきあり今人の性も亦然り所具の  
 善ありと雖も惡根の其内雜はれるは因て故に偏亂  
 の弊ありバ理相争はんと欲じ天良淺く易く其所發は不義  
 なり問ふ人心の邪且壞れたるは何の法を用ては是を變せ  
 ん其心を正せん欲せる者の先づ其意を誠よすと此言  
 是なるや答ふ非なり心の意を出すの源の流を出す如く流  
 の汚濁を欲せば先の其源を清くせば心は源なり若し心  
 正んからば意は自誠ならん問ふ何者を以て正心の法とな  
 すや善書を看で善道を聽んか答ふ非なり此心已邪ならば  
 善書を視るも見ざる如く善道を聽くも聞かざる如きなり

問ふ格物致知は正心の始功と謂ふべきや答ふ非なり格物  
 の乃ち事物の理に窮到り其極處の不到なきを欲するなり、  
 致知の吾の知識を推極して其所知の不盡なきを欲するが  
 り此功最も難じ舉世其人を未見ざるなり何能く心を正さ  
 んや況や格致の才に關し徳に關するは非ざるなり有才で無  
 徳者多く有徳で無才者も亦有り才徳の兩ら相屬せず格致  
 等の法を以て人心を正せば止克正の名ありて克正の實な  
 るを總るは人にして法の能く其心を正なきなり但人  
 は能はず真神は能ざるなり真神の人心を感化するは  
 必此心始て得て正かるべし人は俱し真神の所造もして能  
 く造られたれば自ら能く正さば必然の理なり然とも真神

の我心を正くせんを要せば心に先づ耶穌を篤信し其名よ  
 靠て真神に求め聖神の恩化を賞賜せられんを求め方よ可  
 なり問何を以て聖神と謂ふ答ふ聖神の真神三位一體中  
 の第三位なり其功用を人心を感化し人を能く邪を去  
 り正し歸じ惡を改め善をなし身前よ安慰を得て身後に明  
 宮に入らむるあり問ふ聖神の人心を改正する恩典の至  
 大なり我は無功有罪の人なれば恐り易得ざるべし天下の  
 罪萬分あり救主の功萬々分なり心を誠にして主功に頼て  
 真神に求めば此恩皆得べきあり問ふ聖君賢相真神に求る  
 り可あり我等小人何ぞ敢て至高の真神を冒し求るや答ふ  
 天下の人民の真神の子女よ非るなく同く至寶の靈魂あり

人の身分に、尊卑あれども、靈魂には貴賤なし天子より庶人  
 人よ至まて身死せるも、魂を皆死せず、同く眞神の臺前に至  
 て、其審判を受るなり、何を卑小を以て、自限を得んや、人の門  
 弟資格を以て、人を取る、俗眼なり、眞神は、決して若是ならざる  
 なり、眞神は何ぞ怒るや、邪惡の心を怒るなり、眞神は何ぞ喜  
 ぶや、悔改の心を喜ぶなり、富貴、貧賤、論なく、一様は看待  
 故に窮苦卑微と雖とも、若し能く罪を悔ひ、過を改めて、耶穌よ  
 信頼して、天父よ求め、父を必ず樂せ、所求を准し、聖神は感  
 化を恩賜せるなり、世人は奉勸も、主耶穌の道に習ひ、聖教に  
 入て、時々祈禱し、同く正心め福を得べ可なり、○聖教問答の  
 數語を、後よ摘録し、觀者明むと易し、問ふ、聖神を誰たる曰く、

眞神の三位一體中の第三位なり、眞神ハ、只一あり、一にして三、三  
 一、聖神別の何の稱あるや、曰く、眞神の神、耶穌の神、保惠師、等  
 の稱あり、問ふ、其功用若何ん、曰く、人を照亮し、人を安慰し、人  
 を感動し、人をし、て罪を知り、人を助て、惡を改め、善に遷り、救  
 主を篤信して、靈魂の救を得せしむ、問ふ、耶穌云く、人重生せ  
 ざれば、眞神の國に進む能はばと、此の重生の何意あるや、曰  
 く、重生せる者ハ、人の善心を復し、人の天良を生じ、其舊染の  
 汚を去て、新人とせるあり、此ハ聖神の力あり、問ふ、道を聽く  
 者、聖神を要するや、曰く、眞理を聽く者ハ、必ず聖神の感化し  
 て方よ、聽得て、清白となり、自ら有罪を知て、是を痛恨し、正  
 改め、善よ改んを思ひ、眞道の味を覺て、投服せるを要するか

り問ふ道を信じて教よ入る者ハ聖神を要するや曰く必ず  
 聖神の時々刻々心に充滿し智慧德行方に能く日に所増あ  
 りて信徳堅固となり迷惑を受けず熱心を以て主に事し聖  
 潔となるを要するなり問ふ曰力に靠て能く過を改て善を  
 事し聖潔となるや曰く萬々能はず心を以て聖神に靠れ其  
 心を洗ひ其心を正くせん問ふ如何にして能く聖神を得る  
 や曰く耶穌の名に頼て天父よ求めば方よ是を得るなり耶  
 穌曰く爾等不善と雖も尚ほ善物を以て手よ給ふるを知  
 れり何を況や天父を聖神を求る者よ是を賜はさらんや  
 復生の道  
 人生は身魂合一として成れり死を身魂相離るふり身は朽化

をれとも魂を尚ほ在り然とも身死と雖後必ず復生し魂  
 と再合して一とあり其身の前所行の報を受るなり世に  
 在て身魂共し善悪を行バ復生の時に在て共に賞罰を受く  
 べし此は理の公よして平なる者なり復生の事を魂を失へ  
 る者返み非ず亦世を轉じ胎よ投ずるに非ず天地の末日よ  
 墓に在る者皆耶穌乃聲を聞て出で其身魂と合めて審判を  
 受るなり此を公審判となす人死をれば其魂必ず眞神の前  
 に至り善悪を別て刑賞を受く此を私審判とを私審を各人  
 獨立で被審るなり末日の公審よ至に及せは然らず萬世の  
 人齊集で審を受け天使と魔鬼も亦皆審を受るなり彼時主  
 は上天下地陰陽の兩間よ所有の生靈の前よ於て特に其大

公にして私なきを顯すあり、問ふ、復生は道據あるや、曰く、一  
あり、此理聖經に載たり、主曰く、時至らば、凡そ墓内の者、我聲  
を聞て、出で、善を爲せる者は、復活して得生あり、惡を爲せる  
者も、復活して罪を受くべし、保羅曰く、末世には、死者必ず甦  
り、死せざる者も、悉く化せん、其時能く朽さる者は、加られる  
に、朽さるを以て、死せる者の、加へられるに、死せざるを以  
てせん、と、此類の語甚だ多し、一、耶穌の己身の復生をるを據  
とせり、主の生前に、云る有りき、我死せば、必ず復生せん、と、  
其後十字架に死して、而して葬られ、三日よむて、果して復生  
せり、若し復生の理なくば、耶穌何ぞ能く復生せん、然く主誠  
よ復生したらば、其復生の諸死者の、始一たり、耶穌の人を救

ふ、全人を救ふなり、人罪よ由て死をれば、耶穌は、全く代贖  
ひ、死亡よ勝て、全人を救ふあり、魂を救て、身を救ひ、されば、半  
の救て、半の救ひさるあり、主は是の若くからず、故よ必ず人  
身を、して、死より復生せしむるあり、且主は全能あれば、人身  
の、皆主の土をもて、構成せるあり、能く土をもて、人を造らば、  
必ず能く土よ入の、死者を、して、再生せしむるなり、又全知あ  
れば、人身の何處よ、葬たるよ、論なく、主必是を、知て、末日よ  
於て、必是を、復活せしむるなり、問ふ、人の身、土中よ、朽るあ  
り、水、火よ、毀てるあり、魚腹よ、飽めたるあり、焉ぞ能く復生  
せるあらんや、曰く、凡そ物を、變化ありと、雖も、滅没するさ  
き、かり、柴の火を、經て、焚くる如き、滅るよ、非るなり、化して

原質に歸せざるのみなり、且人の身内に朽る能はざる者あり、  
 其外体の化して朽ると雖ども、内の不朽の者尙在れば、後よ  
 必ず復生の基とあり、末日よ於て、主必ず是を起して、活きし  
 びるなり、己に死したるの身の是を種よ譬ふ、種は必ず朽化し  
 て、後に生ずるなり、倘種子を、几案に置くも、決して生せず、必  
 ず地を種れば、其外を以て朽じぬ、化して内自ら萌芽せるな  
 り、問ふ、復生の身の、本身と、一なるや、二あるや、曰く、試に穀の  
 種より、出るを觀よ、生ざる所の穀、本種と一に非ずと、謂を得  
 ざるなり、人身果して、不滅の質あれば、復生の身の、此質より  
 出でん、故に復生の身と、本身とを、二あるに、非ざるあり、問ふ  
 復生の身は何の形状あるや、曰く、詳に言ひ難し、止、本身と同

からざるを、知るあり、穀を種る者、始め一粒を種れば、其所生  
 の穂は、種子の形状と、大よ相同からざる如し、復生の身も、亦  
 然く、本身に勝る多くなり、本身は血氣の体にして、榮光あ  
 且つ衰弱して、朽ち易し、復生の身の、神靈の體よして、榮光あ  
 り、且強壯よして、其不朽の、永生の魂と、相稱ふなり、天上の福  
 の、永福よして、不朽の福なり、易朽の身の、必き不朽の福を享  
 する能はず、故に、復生の身の、生前の身と、本一あるも、形は殊あ  
 るあり、問ふ、此復生の理の、其深妙を極るよ、何の物理、是を顯  
 すあるや、曰く、有り、試よ譬よ、付て言はん、蠶既よ成れば、動さ  
 る死よ似たり、後復生して、身化し、蛾となるあり、前の爬蟲た  
 り、後の飛蟲たり、前の桑葉を食ひ、後の清露を飲む、果して死



して復生せるあり、蛾の形体の、但蠶は異なるのみ、非ず而して且較れば蠶より美なり、又冬日の禾稼草木の皆枯る、死に似たるあり、春に至れば皆復生す、穀種地を遺て化せざれば、尙一粒あり、化すれば、實を結ぶ多し、棉種も亦然り、是れ由て觀れば、人の皆此復生の理に倚て、衣食をふせなり、是を萬物に推せよ、皆此理を顯せり、眞神の能く蠶をして化して蛾とあらむむれば、豈人の血氣体をして復生して化し、神靈の体とあらむむる能はざらんや、此理極て眞實よして、極て奥妙あり、心を潜めて、玩想せば、始て能く畧解せむ、畧解せる後に、自ら意味愈明ならべ、愈信するあらん、○經に曰く、眞神一日を定て、所立の人をもて、天下を義判して、是を復生せ

んと欲すと、所立の人を、耶穌あり、或問ふ、經に曰く、眞神人を審判すと、又曰く、耶穌の人を審判するを何ぞ、曰く、耶穌を眞神三位一体の眞神審判の大權をもて、第二位の聖子耶穌は、托もる、是なり、俗に傳ふ、冥府に十閻王等ありて、死後に、訊を彼に聽をと、惑へるあり、此皆人心にて、設想たる物よして、斷て信ずべからず、偶像よ託して、教を設れば、人心愈偽て、世道愈汚れるなり、審判の主は、耶穌なり、主人の身行、口言、心想の、邪正をもて、是は報せらるよ、刑賞をもて、善には善報あり、惡には惡報あり、此れ自然の理よして、人の皆知る所なり、然ども人の識見よ、限ありて、止現世の報應を知て、身後の賞罰を、明にせざるあり、噫、人壽幾何ぞ、身死して墓中よ、被葬れど

も身死して魂は死せず、土は土に歸し、氣と氣に歸るなり、孰か、靈魂の所歸の處を知らん、又孰か、天地の末日に萬人必ず、肉身をもて復生し、各靈魂と相合して、共に主前に至て、其審判を受け、或は天堂の福を享け、或は地獄の苦を受るを知らんや、眞理よて論ずれば、陽世は人を試験する地あり、身後も眞に受報れ時あり、古今來、窮凶極惡なる者よじて、天年を盡し、首領を保て、歿せざるあり、亦規に循ひ、矩を蹈める者よじて、奇窮を受け、刑辟に觸て、死するあり、富貴ある者、豈盡く善人からんや、貧賤なる者、豈盡く惡人からんや、盜跖の壽高き、顔子の命夭せるは、人皆是れ知れを、若し僅に陽報ありて、陰報あければ、豈天道の公からざるに非ずや、然とも、身前の福

苦を久からず、身後の福苦を最も深し、僥倖に由て、世福を得るを、何を恃むよ足らん、意外に世苦よ遇て、憂るよ足らざるあり、眞神を心よ悦び、眞神の命よ服するに、至要あり、惡人の福中よ在るを、可懼の境界あり、善人の苦中よ在るは、可樂の遭逢あり、崎嶇險阻は、今世の路なり、後世の路を、極めて坦直あり、主を信ずる者の、天を怨とせ、人を尤めず、報應の、或は差をんを、疑とざるに、將來よ清平の一日あるを、知よ、因てあり、問ふ、耶穌の如何よして、人の中藏及び所行の、各の暗事を知るや、殆ど偵探する者あをて、是を告るや、曰く、非あり、耶穌は、明暗を知らず、明暗を分たざる所あり、或は中藏あるも、或は外著なるも、皆能く知るあり、末日よ至れば、主は世人を分て、善惡

此兩途となせり善の眞神を恭敬せる者よあて耶穌の功  
 よ倚頼して罪を悔の過を改れば此等の人の罪よ定めず主  
 の命して其右よ坐せしめ認て己民とかい領して高天に至  
 て永福を賜享けしむるあり惡は眞神を恭敬せざ耶穌よ信  
 頼せず悔改を知らざる者よして此等の人の魔鬼の徒なり  
 魔鬼と共に淪沉の苦を受くるあり故よ闕者よ勤む切よ佛  
 道の二教獄を破り靈を度と及び輪廻等の説を聽信する勿  
 れ此の皆人心を迷陷して彼の錢を賺は法を成せのみなり  
 更よ各よ勸む速よ一切の罪惡を悔る一切の邪行を改め偏  
 よ已暗を離れ彼光よ就き眞心に主よ靠らば眞神の選民あ  
 るを得ればなり主の顯現此日よ迫む心坦然として懼れお

かる可し主降臨して萬人を審判するの時よ亦其面前よ立  
 て愧ざるべし

悔改を要と爲す

語よ云く過ては改るよ憚る勿れと朱子解して曰く自治て  
 勇ならず惡日よ長む故よ惡あれば速よ改て難を畏て苟も  
 安んべからざ程子曰く學問の道は他あり其不善を知れば  
 速よ改て善よ従ふれみと遊氏曰く學者過て改るに吝なれ  
 ば終に徳よ入るなり而して賢者も亦必ず善道を告るを樂  
 まざるなり此言甚た善と亦耶穌の眞道と相合なり猶太人  
 を耶穌訓諭して曰く爾等悔改べし悔改めざれば必き死亡に  
 至らん十二使徒耶穌の命を承け外に出て教を宜しとき亦

悔改の道を傳へたり、雅典の人に保羅勸て曰く、往よの肩味  
 まして、行ひしも眞神咎めざるが、今は隨在、衆よ命じて悔  
 改をむと、是よ由て此を觀れ、眞神國の門の悔改るよ在り、  
 凡そ是よ入らんと欲むる者の必ず此の門より走るなり、悔  
 改よ五意あり、一は曰罪を覺るなり、二は曰罪を認るあり、三  
 は曰罪を容さざるあり、四は前罪を憂愁にるあり、五は必  
 罪を離れんと決ひるあり、悔と改との相轉じて行ひ、既往の  
 罪を悲む、是を悔と謂ひ、當行の善よ遷る、是を改と謂ひ、人の  
 罪の極て多む、今茲よ歷々是を言はず、惟一大罪あり、首に指  
 出よ可も、眞神を敬せず、眞神の救人の道を棄て、信せず、邪教  
 邪事を愛して、是を信じ、是を行ふは、皆大罪なり、皆速よ改む

べし、此邦の人士、請ふ、細よ聖經を玩ひ、其眞解を得て、此道を  
 崇奉し、積習を破除し、光中よ在で、行を美とせよ、切に此道の  
 源を中國に發せずと、謂て、是を信奉せざるなれ、試よ思へ、  
 火輪、舟車、電線、機器等は、皆中國より出せず、而して中國よて、  
 一一是を用るなり、又牛痘は、天花を出すを免れ、無數の  
 性命を救濟せ、又金雞納は、無數の熱症を被免しめ、亦無數の  
 病疾を救ふも、皆中國より出せざれども、是を究るよ、中國畢  
 究是を棄てざるなり、大道の邦國に限らず、至理は、中外に通  
 ず可きなり、孔子の魯に生じ、其道遍く、齊、楚、宋、衛の邦よ、傳え  
 る如し、何の道、何の書を論せず、其實を察して、我に益あるや、  
 天下よ、益あるを問へ、道を是とせば、進み、道を非とせば

退き斷て本國より出るよ非るをもて輕視を可らき英、美、等  
 の國にも前に亦此眞道無りしが今是を篤信し是を廣傳へ  
 たりき或ハ西人は僻せて懸方よ在て見聞隘陋よして共  
 道を論ずるよ足らずとすれども西方は商をなむ者のみ諸  
 國を遍歴するに非ず亦士人の天下よ廣く遊ぶ有て經る所  
 の地よ於て其語言文字を學び其古今の書籍を譯し其風俗  
 を察し其道術を問ふ者あるを知らざるなり然とも獨所重  
 の者は東方猶太國ハ耶穌の聖教あり實に其原は天より出  
 て至眞よして妄なきの道と爲し世教に走出せる萬々倍な  
 るを知るよ因てあり故に泰西の諸國但自信するのみに非  
 ず更よ遠く重洋を越え資を支へ險を履み此教を奉じて天

下よ廣く傳ふるなり誠に此道と或も離る可らざるハ水火  
 の一日も無る可らざる如きを以てなり亦言行交修れば足  
 れり何ぞ必ず眞神を敬事せんと謂ふ勿れ此れ大謬の言な  
 り人の子とる者人を待し物よ接し疵の指よ可きなきも父  
 母に敬事せずバ衆是を視て何等の人となすや眞神と萬有  
 の眞源萬民ハ天父よして父母の比よべき所に非ず父母を  
 敬せずして罪あらハ況や眞神を敬せざるをや且眞神を敬  
 せざる者は言行交修るの實を有し易からざるあり亦眞神  
 を敬するハ可なり耶穌を信するハ不可ありと謂ふかかれ  
 人身罪われハ人必ず染汚也惟耶穌能く是を救て諸惡を脱  
 離せしむるなり罪惡離れずハ沉淪を免れず耶穌云く眞神

獨生の子を以て世に賜ひ是を信する者を以て、沉淪を免て  
 永生を得せむ其世を愛する是の如し信者の罪は定めら  
 れず不信者の罪は定めらる眞神の獨生子の名を信せざる  
 其因でなりと故に耶穌を信するの急用の務とあすなり亦  
 人死すれば魂散れ何ぞ救靈の道を用んやと此言謬る甚し  
 但主道は合ざるのみならず亦古聖の傳は合ざるなり黃帝  
 在世百年の後龍は騎て天帝は朝じ湯王在位十三年にして  
 登退して帝郷は歸る文王上は在て於て天は昭あり又文王  
 陟降して帝の左右にある類如此の語は身死し魂生るの據  
 非ずや聖王の若きは天帝は朝じ帝郷は歸り帝の左右は  
 在りの福報あり試し思へ桀紂等の人の魂何の處に歸する

豈暗府に沉淪する非ずや善を賞む惡を罰するは必然  
 の理あり今世は人を試鍊するの所にして一定の報なり死  
 後を審判を受け或を賞げ或を罰する毫釐も爽はざるな  
 り亦各國は各其教あり中國は儒教あり亞位伯は回教  
 あり印度は佛教あり西國は耶穌教あり亦各其本教を  
 宗とするのみと謂ふ勿れ萬國の人の只一天父を同じ一救  
 主を同じすれば一道を同じし一教を同じし東西の別なく  
 彼此の分あかる可きを知らざるあり太初の時を推究むれ  
 ば本と三教なり其後漸く偽て多く岐じ各國聖人の所立の  
 善言も皆眞神より來れば耶穌是を廢せざるなり是を究れ  
 ば聖人の光は星月の如く人の用は足らず耶穌の光は太陽

の如く衆理を照著して餘あり或曰く耶穌教既は大用あら  
 ば何ぞ早く中國に入らざると曰く往古は在て華人も亦上  
 帝あるを知て是を敬奉せしが代異は時移るは及で遂は眞  
 を離れ假を崇べり豈中國の大罪は非や且千數百年の前  
 は耶穌聖教中の人福音を東土は傳へむとあり今の陝西西  
 安は碑ありて誌とふせり泥や物の用たる大なれば是を其  
 成と必ず緩し松柏能く草菜と長を争んや是を總るは耶穌  
 聖教の攀世益是を用て尙るなきなり是を遅つて又久くと  
 て始て興り基は猶太は植て亞細亞の西は萌芽と幹は歐羅  
 巴に成て枝は亞米利加は蔓と今漸く中國は移り寰宇に遍  
 及んとん天下の大小各國を統ふるに皆教を傳る者恭く眞

神の眞道を傳ふるあれは誠は信じて悔改る者其數を計ら  
 ざるあり惟華人の急に警醒して邪を捨て正は趨き救世の  
 主を信じて眞神の愛子とあり同く永生を得べきを望むか  
 り

明治十九年三月御届  
六月出版

同  
明治十九年三月御届  
六月出版

正價二十錢

譯者

東京府平民

木曾五郎

出版人

東京府平民

鈴木清左衛門

賣捌所

十字屋

倉田繁太郎

同

同

岩藤錠太郎

同

村田真吉

同

丸善書店

日本橋區通三丁目



明  
出  
出  
出

出  
出  
出

出  
出  
出

出  
出  
出

出  
出  
出

出  
出  
出

出  
出  
出

出  
出  
出

(五)

東

木

正

潤

東

木

正

潤

谷

木

潤

山

木

潤

水

木

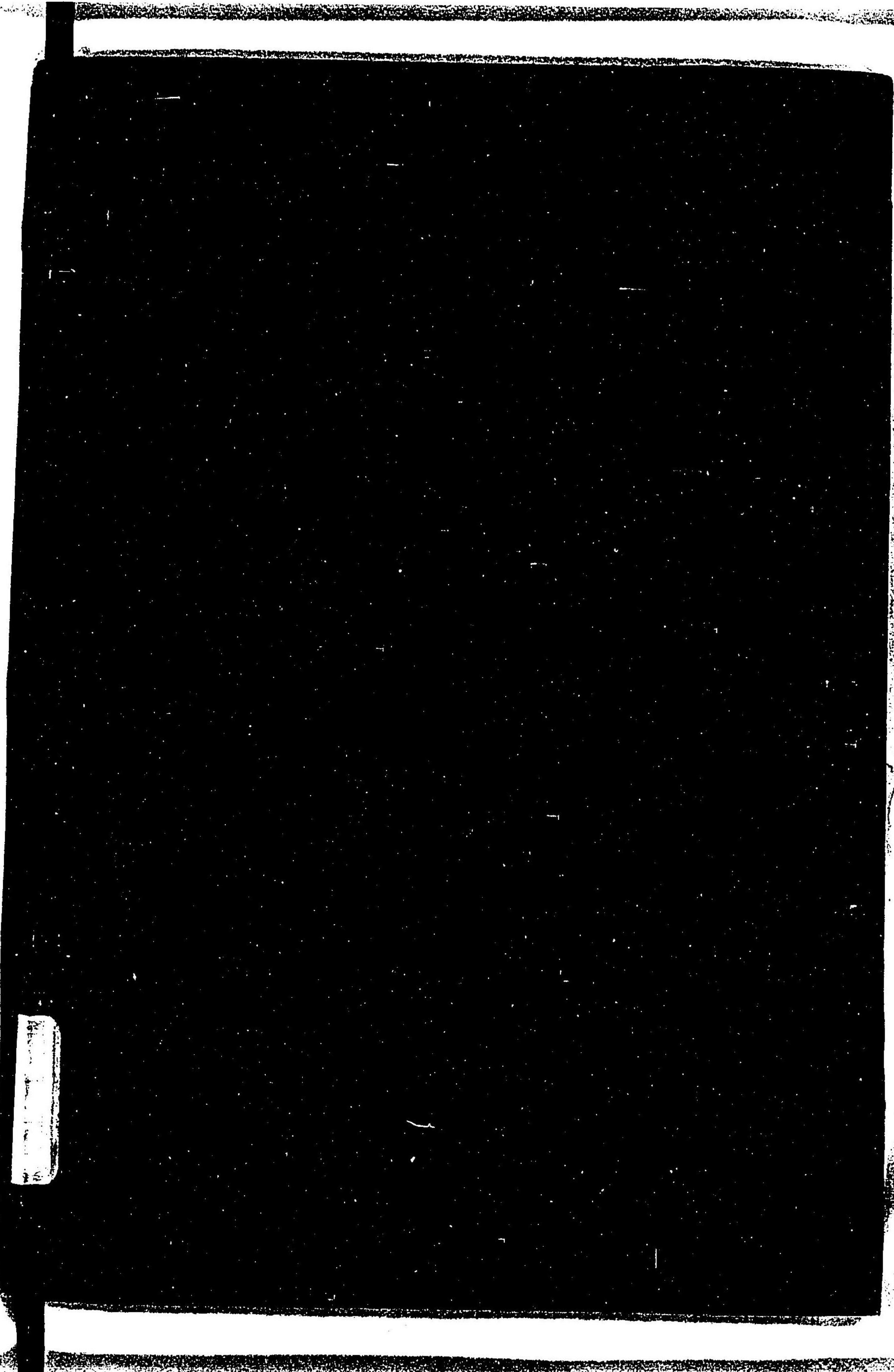
潤

武

木

潤

18  
51



18

51

020849-000-3

18-51

真理八篇

楊 格非/著

M19

ABI-0680



15.23

